

信濃町の埋蔵文化財

上ノ原遺跡

(第2次・町道地点)

発掘調査報告書

— 杉久保型ナイフ形石器を含む石器群・尖頭器石器群の遺跡 —

2008

長野県信濃町教育委員会

上ノ原遺跡

(第2次・町道地点)

発掘調査報告書

— 杉久保型ナイフ形石器を含む石器群・尖頭器石器群の遺跡 —

2008

長野県信濃町教育委員会

例 言

1. 本書は平成5年度町道柏原幹線1号線道路改良工事にかかわる上ノ原遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、信濃町長から委託をうけた信濃町教育委員会が、平成5年5月10日から平成5年10月12日にかけて実施した。

整理作業は、平成5年12月よりはじめ、平成20年2月までにおこなった。

3. 発掘調査地籍は、長野県上水内郡信濃町大字柏原字西両であり、上ノ原遺跡の範囲内に位置する。

4. 本書は、調査によって確認された遺物とその出土状況を中心に、基礎資料を提示することに重点をおいた。

5. 本書に掲載した地図は、信濃町作成の都市計画図および国土地理院発行の地形図(1/25000)を使用した。

6. 本書で扱っている国家座標は、ことわりのない限り2002年以前の日本測地系(旧測地系)である。

7. 本書作成に至る分担は、下記のとおりである。
整理作業参加者…中村敦子、岩瀬 彬、川端結花、中村由克、佐藤ユミ子、今井美枝子、長谷川悦子、

横山真理子

協力者…中村祐貴(データ入力)、橋詰潤(実測)、竹田雄太、宮本竜太郎(計測)

本文執筆…中村由克(I~III、V)、岩瀬 彬(IV)
編集…中村由克

8. 調査によって得られた諸資料は、野尻湖ナウマンゾウ博物館で保管している。出土資料の注記番号は、次のとおりである。

上ノ原遺跡 93UH

9. 本報告書では、旧石器時代の石器は整理番号(1~3656)で表記する。本文中の記載、表2、石器図版、写真図版のすべてに対応する。

10. 石材名の略記号

OB 黒曜石、AN 安山岩(無斑晶質安山岩)、SH 頁岩類、TU 凝灰岩、CL 玉髄、CH チャート、GE 下呂石、SAND 砂岩

11. 石器名の略称(石器図版で使用)

ナイフ:ナイフ形石器、尖:尖頭器、彫母:彫器母型
なお、「剥片」としたものは、二次加工のある剥片、微細剥離痕のある剥片を含む。IV章の記載、分布図、表2~表5でも同様。

目 次

I 調査の経過	1	4) 遺物解説	13
1 調査に至る経過	1	5) 接合資料	15
2 調査体制	1	6) まとめ	16
3 調査経過	1	4 尖頭器石器群	17
4 調査方法	2	1) 概要	17
II 遺跡の環境	2	2) 器種組成・分布	17
1 地質・地理的環境	2	3) 碎片との関係	18
2 歴史的環境	3	4) 遺物解説	18
III 発掘地の状況と調査の概要	4	5) 接合資料	21
1 発掘地の状況	4	6) まとめ	22
2 遺跡の地質層序	5	5 帰属不明の石器群	22
3 旧石器時代の遺物と遺構の概要	5	1) 概要	22
1) 遺物の概要と層位	5	2) 器種組成・分布	22
2) 礫群の位置と概要	5	3) 接合資料	22
3) 焼土の位置と概要	9	V 上ノ原遺跡(第2次・町道地点)発掘調査の成果	22
4 縄文時代以降の遺物と遺構の概要	9	引用・参考文献	24
IV 旧石器時代	9	分布図 図8～図31	25
1 基本的分類	9	資料 表2～表5	34
1) 器種分類	9	図 版	
2) 石材・母岩別分類	10	石器図版	40
2 資料の分離	10	発掘写真	58
1) 石器群の分類	10	石器写真	66
2) 遺物分布の検討と報告の単位	11	英文要旨	75
3 ナイフ形石器群	12	報告書抄録	76
1) 概要	12		
2) 器種組成・分布	12		
3) 碎片との関係	13		

I 調査の経過

1 調査に至る経過

野尻湖の位置する長野県上水内郡信濃町には、44ヶ所の旧石器時代・縄文時代草創期の遺跡が確認されており、中部地方でも有数の遺跡密集地として特に注目を集めている。平成9年(1997)10月、この地域に上信越自動車道が開通することになり、平成2年(1990)以降、信濃町では緊急発掘が多くおこなわれるようになった。

とりわけ、野尻地区と柏原地区の境界にあたる貫ノ木には、信濃町インターチェンジ(IC)が設けられ、長野県埋蔵文化財センターにより大規模な発掘調査がおこなわれた。さらに、インターから長野側の出口にあたる上ノ原をはじめ町内各所で、取り付け道などの関連事業が実施され、主に信濃町教育委員会による発掘調査がお

こなわれている。

町道柏原幹線1号線(現在・県道杉野沢―黒姫停車場線)は、信濃町大字柏原の国道18号線から国道18号バイパス線をつなぎ、信濃町ICに連絡する道路である。

平成5年3月10日、信濃町長より文化庁長官あてに、埋蔵文化財発掘調査の通知がされた。
(文化財保護法第57条ノ3第1項)

平成5年4月10日、町教委より埋蔵文化財発掘調査の通知(文化財保護法第98条ノ2第1項)

5月10日 上ノ原遺跡の発掘調査に着手

10月12日 発掘調査の現場作業を終了

2 調査体制

発掘調査(平成5年度)

調査主体者 信濃町教育委員会

教育長 片山 幹成

事務局 信濃町教育委員会

総務教育課 課長 山崎 功一

総務教育係 係長 松木 武夫

文化財担当者 渡辺 哲也

係 高橋 哲

調査担当者 中村 由克

調査参加者

青柳 香、新井のぞみ、池田か己子、池田和三、石田和子、石田秀夫、今井美枝子、大川和子、大川成司、小日向キヨ子、片山トヨ、北村、木村キミ子、佐藤せいじ、佐藤ユミ子、杉浦栄子、杉浦武明、竹内晴江、竹内ゆき子、寺田 学、戸田秀則、中沢光江、中村ヨネ子、永原

シズエ、永原忠利、東 貢、福沢キサエ、渡辺 稔、和田、山下紀代、酒井俊子

記録：中村教子、中村由克、亀田聡、高橋哲、渡辺哲也、近藤洋一

新潟大学博物館実習生：百瀬、外山、五十嵐、鳥居、高橋

報告書作成(平成19年度)

調査主体者 信濃町教育委員会

教育長 小林 豊雄

事務局

教育委員会 次長 静谷 一男

係長 丸山 茂幸

文化財担当者 渡辺 哲也

調査担当者 中村 由克

3 調査経過

平成5年(1993)

5月10日 上ノ原遺跡の発掘調査に着手。表土剥ぎ。

5月12日	遺構・遺物確認調査開始。		を設置して写真撮影。
5月17日	発掘区面の設定。	8月25日	礫群の記載開始。
5月18日	グリッド面発掘開始。	9月17日	礫群の全体写真撮影。
6月11日	杉久保石器群のブロック確認。	9月22日	国道側部分を測量し、引渡し。炭窯の発掘記載。
6月21日	工事用道路のため用地南部の調査を先行することを決定。	10月1日	焼土の実測記載開始。
7月22日	工事用道路を用地北側にすることに変更。	10月7日	南側の地質記載開始。強風のためテントが飛ばされ破損。
8月19日	上ノ原遺跡の成果のマスコミ公開。	10月12日	記録、測量終了。用地の引渡し。現場テントを東裏団地へ移動。
8月21日	遺跡現地説明会、50名参加。		
8月24日	旧石器時代発掘面の清掃、ローリングタワー		

4 調査方法

1) 調査区の設定と発掘方法

最初におこなった用地内の試掘調査の結果、上ノ原遺跡の範囲内では、高台となっている緩斜面のほぼ全域が全面発掘となった。遺物の散布が認められたので、ほぼ全面的に発掘対象地となった。

そこで予定地内の表土、柏原黒色火山灰層の上部を重機で掘削し、遺構・遺物の確認作業に入った。この結果、旧石器時代の遺物が出土することが確認されたので、予定地全域を全面発掘とした。

2) グリッドの設定と呼称法

グリッドの設定にあたっては、国家座標を基準とした5m×5mの区画を設定した。西から東へAからYまでの大文字アルファベットを用い、北から南に数字を用いた。Y = -26840.000をK列とし、X = 90205.000を1列、X = 90180.000を6列とした。したがって、上ノ原遺跡(2次・町道地点)の調査地となった場所は、D~U、0~6までの区画に属す合計87グリッドである。なお、1993年に設定した上ノ原遺跡の大区画では、6区のうちC~E、G~I区に属す。

II 遺跡の環境

1 地質・地理的環境

信濃町は長野県北部にあり、新潟県境に接する。町域は東西に3つの地形に区分される。東部は、第三紀鮮新世~前期更新世の砂岩・泥岩などの堆積岩が分布するなだらかな基盤山地である。これらの上位を斑尾山起源の安山岩類が被っている。野尻湖はこの基盤山地の中に位置している。

西部には、中・後期更新世の飯縄山、黒姫山の火山岩類がつくる火山地形が分布している。飯縄山の東麓から野尻湖の南方には、緩やかな地形の丘陵地がひろがる。これらの丘陵地は、上述の野尻湖のまわりの小起伏面とあわせて、鼻見面(井上、1962)ないし鼻見面群(豊野

団研、1969)とされたもので、中期更新世の飯縄山・黒姫山等の火山活動以前に形成されていた侵食平坦面であると思われる。

これら東西の山地に挟まれた中央部には、水田や集落が分布する低地帯がひろがっている。丘陵は後期更新世の泥流堆積物などからなり、段丘は後期更新世の湖沼・河川堆積物からなり、低湿地は後期更新世末から完新世にかけての湖沼・河川堆積物からなっている。

黒姫山東麓と野尻湖を源とする信濃町北部の山桑川、赤沢川、池尻川は関川水系に属し、北方に流下して上越市で日本海に注ぐ。一方、長野市戸隠を源とする鳥居川

は、黒姫山と飯縄山の間に東に流れ、信濃町古間で南東から南に方向を変えて、長野市豊野町で千曲川に合流する信濃川水系に属す。これら両水系の分水嶺は、信濃町柏原の低地ないし丘陵地の中に位置するため、信濃町の中央部にはなだらかな高原地形がひろがっている。

2 歴史的環境

信濃町は長野県から新潟県にぬける交通路に位置し、近年では北国街道や信越本線、国道18号線、上信越自動車道といった内陸側と日本海側をむすぶ主要幹線路が通過している。このような交通の要所となった背景には、黒姫山などの第四紀火山と野尻湖のまわりの基盤山地とのあいだに形成された、山間地では比較的珍しい平坦地が高原状に続く地形的特徴によるものである。このため、起伏の少ない峠越えの通路となっており、また、信州の中心地である長野盆地や上田盆地から最短距離で日本海（上越市）に通じる路線として、古くから利用されてきた。

信濃町には現在、173ヶ所の遺跡が知られている。この大半が、信濃町中央部の低地帯と東部の基盤山地の中の丘陵上や谷沿いに分布する。これらの遺跡は、旧石器時代中期から中世・近世に至るものであるが、その時代には大きな特徴がある。

第1は、旧石器時代の遺跡が野尻湖の西部から南方の丘陵地を中心に数多く分布することである。野尻湖西岸を中心とする旧石器時代の遺跡群は、野尻湖遺跡群と称されている。現在までに、信濃町では約44ヶ所の遺跡が知られている。

野尻湖立が鼻遺跡は、中期旧石器時代末の約48～33万年前の遺跡で、大量のナウマンゾウ、ヤベオツノジカなどの大型の哺乳動物化石とともに石器や骨器が出土することで有名である。一般的な住居地（集落）の要素がみられないことから、狩猟解体場遺跡（キル・ブッチャリング・サイト）と考えられている。

仲町遺跡は、後期旧石器時代の全期間、さらに縄文時代以降へとつながる野尻湖遺跡群のなかでの中核的な遺跡である。

これに対して、上ノ原遺跡、貫ノ木遺跡、東裏遺跡、日向林B遺跡、照月台遺跡などの主要な後期旧石器時代

上ノ原遺跡がある柏原地区の上ノ原付近は、後期更新世の黒姫山起源の火山流下物の上に、湖成層が分布し、それらを覆って野尻ローム層などの風化火山灰層が堆積している。

の遺跡は、ほとんどが丘陵地に分布し、約3万年前のナイフ形石器文化のはじめごろの段階以降に遺跡が形成されたものである。

第2は、信濃町域では、旧石器時代から引き続いて縄文時代前期までは、遺跡の分布が多くみられるが、縄文時代後半の諸磯式期より後、中期になると遺跡数は急激に減少する。この傾向は、弥生時代、古墳時代、奈良時代とつづく。

第3は、ふたたび信濃町域に遺跡が増えるのは、平安時代以降である。現在、信濃町の集落のある場所の多くは、平安時代の遺跡と重なっている場所があり、平安時代以降、町内の各地に集落が形成されてきたことが推察される。

以上のような遺跡分布の特徴がみられるが、近隣の市町村と比較すると、旧石器時代の遺跡が多いこと、縄文時代中期以降の遺跡が少ないこと、そして遺跡数とその密度は近隣地区にくらべてかなり高いことが特筆される。

最初に記した信濃町の交通路の要所としての特徴は、平安時代以降、顕著になったものと思われる。延喜式に記録されている東山道の支路は、信濃町をとり、沼辺駅（ぬのへのうまや）は、仲町遺跡が有力と考えている。町内の主要部（野尻新町、柏原、古間、穂波の間）は、現在の国道18号線におおむね沿って江戸時代の北国街道が通じているが、東山道も北国街道に近い場所を通っていたと推定される。

信濃町中央部の柏原地区には、旧石器時代以降の遺跡が分布する。旧石器時代の遺跡としては、東裏、裏ノ山、伊勢見山、小丸山公園、上ノ原、緑ヶ丘、大久保南、西岡A、西岡B、貫ノ木などの遺跡がある。この地区内で最初に旧石器時代遺物が採集されたのは緑ヶ丘遺跡で、1942～43年ごろ大平在住の小林齊氏が彫器を発

見し、1960年代になって森崎徳氏、小松慶氏らに鑑定されている。

1958年には黒砥山麓の仁之倉遺跡で、町内最初の考古学的発掘調査がおこなわれた(中村, 1988)。前年の開墾により縄文土器などが大量に出土したことがきっかけで、縄文時代早期条痕文土器、前期踏碇式土器、中期堀ノ内Ⅰ式土器、晩期佐野Ⅱ式土器などがえられている。

伊勢見山遺跡は上水内北部高校教員の小林学氏が山頂近くの畑地から旧石器時代の遺物が出土することを確認し、1963年11月に國學院大學樋口清之氏、小林達雄氏らによって発掘調査がおこなわれ、ローム層中に上下2層の石器群が出土した。

1988年には柏原町区誌が刊行され、その一環として柏原地区の遺跡分布調査を実施した(中村, 1988)。この結果、上ノ原遺跡と小丸山公園遺跡が新しく発見され、また遺跡範囲が明らかとなり、野尻地区と並んで柏原地区も旧石器時代の遺跡密集地であることが判明した。

1990年からは、町事業や民間店舗建設で上ノ原遺跡、東裏遺跡、役屋敷遺跡が、1993年からは高速道建設とアクセス道路関連で東裏、裏ノ山、大久保南、上ノ原、西岡A、西岡B、貫ノ木などの遺跡が相次いで発掘調査され、後期旧石器時代初頭の石斧・台形石器の石器文化から縄文時代早・前期および平安時代以降の遺構・遺物が多数、発掘された。

Ⅲ 発掘地の状況と調査の概要

1 発掘地の状況

上ノ原遺跡は信濃町柏原地区の字上ノ原を中心として、一部、岡実、西岡、毛無などの地籍に所在する。上ノ原遺跡は野尻湖南南西方の信濃町柏原の北部に位置し、国道18号線にそったなだらかな丘陵の頂部にひろがる遺跡である。北西—南東の長軸方向の長さが約900m、幅250～500mで、面積約330,000㎡におよぶ信濃町でも有数の面積の遺跡である。

この付近では国道18号線が標高698～708m前後のほぼ等高線沿いに走っていて、浅間山麓の小諸市以西から日本海の上越市までの間では、最高地点となっている。地形は高原状の平坦地であるが、西向きの緩斜面となっている。遺跡北端の旧北部高校分校跡地より南側では上越市に流れる岡川—赤川水系に属し、高校跡地より北東側と遺跡南部では、新潟市および長岡市寺泊町に流れる信濃川—千曲川—鳥居川水系に属し、この遺跡付近がこれらの分水嶺となっている。

国道沿いには住宅や店舗が建てられているが、それより奥は主に畑地と一部は山林となっている。第2次調査は、現国道18号線から信濃町ICへ連絡する新設の町道が建設されることになり、おこなわれたものである。調査面積は約1,800㎡であった。

上ノ原遺跡では、これまで7次にわたる発掘調査と個人住宅の調査および高速道関連の調査等が実施されてい

る。主な調査の位置と概要は次のとおりである。

なお、第2次調査については中村由・中村敦(1994)、中村(1994)、中村(2004)で一部紹介したが、調査成果については本報告書の内容が優先する。

第1次調査(1990) 4区FGHKL 農地造成(町開発公社) 細石刃石器群・尖頭石器器群

中村・菅沼・土橋(2008)

第2次調査(1993) 6区C～E、G～I 町道柏原幹線1号線(現在・県道杉野沢—黒姫停車場線) ナイフ石器器群(杉久保石器群) 尖頭石器器群

本報告書

第3次調査(1995) 4区UV 信濃町消防分署出土品 少ない(旧石器時代剥片・縄文時代集石出土)

第4次調査(1995) 7区QRV 信濃自動車(スタンド) 縄文時代草創期、旧石器時代の尖頭石器器群

中村・渡辺(1996)

須藤氏住宅地点(1995) 8区B 個人住宅 ナイフ石器器群(黒色帯文化層) 中村・渡辺(1996)

高速道地点(1994・1995) 黒色帯文化層、尖頭石器器群 土屋・谷綱(2000)

土屋・中島綱(2000)

第5次調査(1995～1997) 12区QRUVW・14区AB 主要地方道信濃信州新線 ナイフ石器器群(杉久保石

器群・瀬戸内系石器群、上Ⅱ最下部文化層)、尖頭器
石器群 中村・森先編 (2008)
第6次調査 (1997) 1区・2区・4区 帝国石油ガス
パイプライン ナイフ形石器群 (上Ⅱ最下部・上Ⅱ上

部)、細石刃石器群 渡辺 (2007)
第7次調査 (1997) 2区 町道大平大久保線 ナイフ
形石器群 (上Ⅱ最下部・上Ⅱ上部)
中村・渡辺 (1998)

2 遺跡の地質層序

発掘地は、国道18号線に沿った丘陵地にある。調査地はほぼ東西方向で、東端の国道交差部が最も高く標高708m、西に向かって標高が低くなり、西南端で標高705.5mとなる。北西端付近には標高707.0mの微高地が存在する。発掘地付近の丘陵には池尻川岩屑なだれ堆積物が地下にあり、その上を水成の貫ノ木層、風成の神山ローム層、野尻ローム層などの後期更新世の地層が被り、さらに地表付近には真っ黒な色が特徴の柏原黒色火山灰層が被っている。発掘地では、下部野尻ローム層Ⅲから上の地層を確認し、上部野尻ローム層Ⅰ最上部の黒色帯より上位の地層を発掘対象とした。

発掘地の標準的な層序は、以下のとおりである。

下位より10cm+の下部野尻ローム層Ⅲ、37cmの中部野尻ローム層、20cm±の上部野尻ローム層Ⅰ、10～20cmの黒色帯、10cmの軟質で暗褐色の風化火山灰層・上Ⅱ最

下部、20～30cmの黄褐色風化火山灰層・上Ⅱ上部・下部、5～15cmの暗黄褐色風化火山灰層・モヤ下部、5～15cmの黒褐色風化火山灰層・モヤ上部、黒味の強い柏原黒色火山灰層約30cmで、すべて風成相で欠如なく堆積している。

遺物包含層となっていたのは、主に上Ⅱ上部からモヤ下部にかけての層序範囲である。柏原黒色火山灰層の約半分と表土は重機で取り去っている。いずれも礫などを一切含まない安定した風成堆積物の層相を示している。

上Ⅱ最下部に挟まれるヌカは、鹿児島県始良カルデラ起源の始良一丹沢火山灰 (AT) に対比され、およそ25,000年前 (未校正) とされている。

上ノ原遺跡のこのような層相からみて、この付近は後期更新世から完新世にかけて比較的安定した丘陵の環境にあったことがわかる。

3 旧石器時代の遺物と遺構の概要

1) 遺物の概要と層位

上ノ原遺跡第2次調査では、旧石器時代のナイフ形石器群、尖頭器石器群を中心に5,313点の遺物が出土した。ほとんどは上Ⅱ上部文化層に属するものであり、上下方向への遺物の拡散は野尻湖遺跡群の中ではあまり大きくなく、レベル的には比較的安定した傾向がみられる。

今回調査の出土遺物の大部分は旧石器時代のものである。旧石器時代では杉久保型ナイフ形石器の石器群と尖頭器石器群の2つが確認されている。2つの石器群は発掘範囲の西側に密集して分布している。発掘範囲の東部には遺物の分布が疎になるが、0-3グリッドを中心に約200点の遺物が出土している。詳細な検討についてはⅢ章を参照されたい。

2) 礫群の位置と概要

発掘地西半のD～I列の3～5グリッドには礫群が集中して分布していた。北西端の小丘陵の南向き緩斜面にそって、東西30m、南北20mの範囲に広がっている。礫のグループを最小単位で数えると、礫群55基、配石12基で、総数67基となった。

構成礫はサイズが5～20cmほどで、重円礫が多く、破損した角礫を含んでいる。発掘地周辺ではローム層中にこのような礫はきわめて少なく、また、地下深くにある池尻川岩屑なだれ堆積物にもこのような礫が多くなく、露出地も近くにみられないために、礫群構成礫は少し離れた鳥居川流域の河川礫が扇状地堆積物から採集・運搬されたものと推定される。礫は熱を多く受けて焼跡となったものがほとんどである。



図1 上ノ原遺跡(第2次・可遺地点)の発掘位置

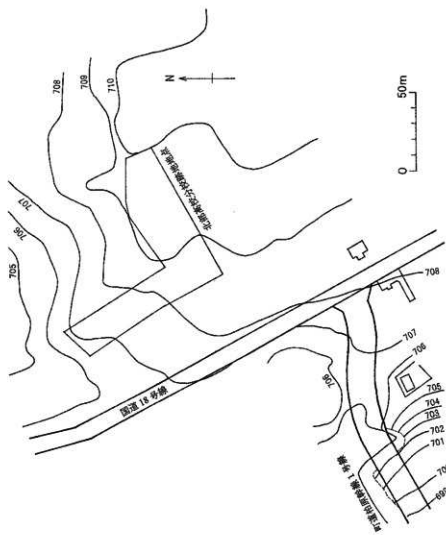


図2 上ノ原遺跡 第1次、第2次調査地点付近の地形(単位:m)

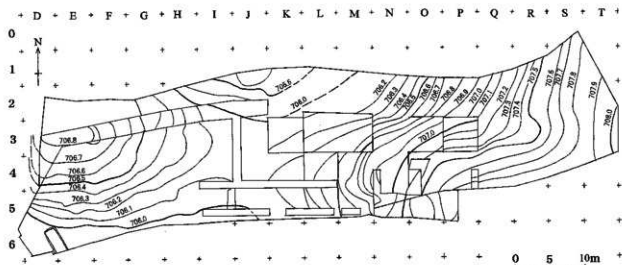


図3 上ノ原遺跡(第2次・町道地点)発掘地の地形
標高は発掘終了時(上部野尻ローム層Ⅱ~Ⅰ)の状況(単位:m)

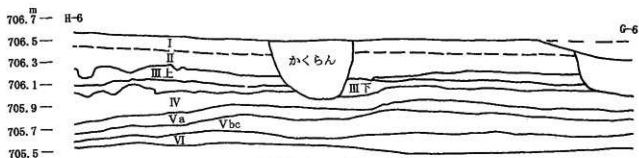


図4 地質層序(G-H6グリッド断面)

I 表土, II 柏原黒色火山灰層, III上 モヤ上部, III下 モヤ下部, IV 上部野尻ローム層Ⅱ
上部・下部, Va 上部野尻ローム層Ⅱ最下部, Vbc 黒色帯, VI 上部野尻ローム層Ⅰ

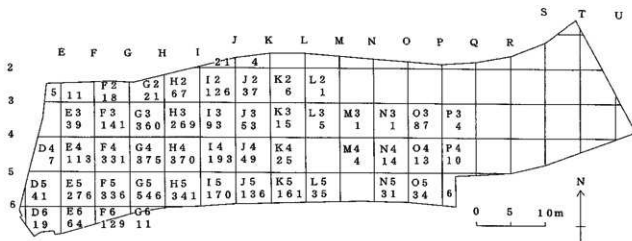


図5 上ノ原遺跡(第2次・町道)のグリッド別出土遺物点数

表1 上ノ原遺跡(第2次・県道地点)の出土品点数

種類	点数(点)
石器類	3,489
漆・漆片	1,782
縄文土器	19
平安時代土器	7
近現代陶磁器	9
炭化物	1
鉄製品	1
動物骨(近現代)	5
総計	5,313

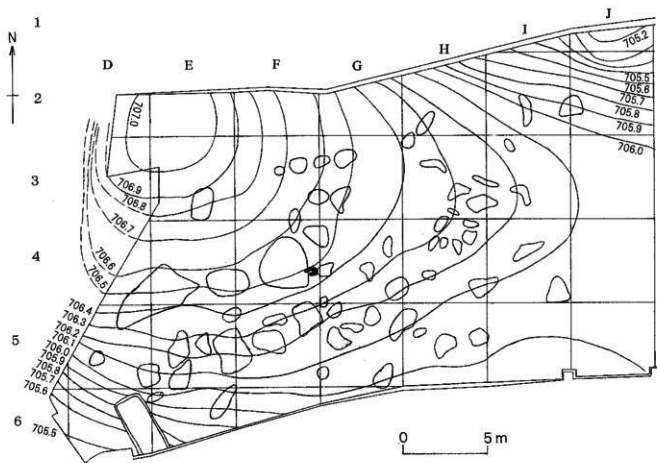


図6 上ノ原遺跡第2次調査区西部における遺構等の配置 (単位: m)

○ 礎群の範囲, ● 焼土, ○ 炭窯

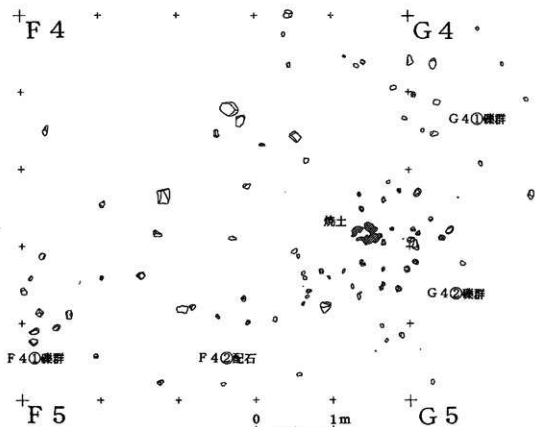


図7 F4グリッド焼土周辺の配石と礎群

この礫群集中地点からはナイフ形石器、尖頭器の石器群5,000点以上が出土した。これらの2石器群は礫群の周辺に分布の中心があった。石器群と礫群の対応関係については、被熱した礫と石器の分布、石器の接合と礫の接合の関係、さらにこれらをふまえて個別の礫群の認定の再検討などを今後おこなう必要があり、今後の課題としたい。

3) 焼土の位置と概要

礫群集中地のほぼ中央に当たるF4グリッドの配石と礫群の周辺から、焼土が確認された。焼土は15×15cmの色の鮮やかな部分(深さ8cm)と、30×25cmの色の薄い部分(深さ13cm)の2つが、東西35cm、南北25cmの範囲にみられた。この付近の約170cm四方には、微細な炭化物(炭)が集中しており、中心部には9×4cmの炭化材が埋もれていた。この焼土が旧石器時代のナイフ形石器や尖頭器の石器群と同時期のものか、より後世に形成されたものなのかは不明である。

4 縄文時代以降の遺物と遺構の概要

縄文時代以降の遺構・遺物はきわめて少なかった。柏原黒色火山灰層からは縄文時代の土器、石器がわずかに出土している。縄文時代早期後半の条痕文土器の破片が16点出土しており、1点は段を有する棚ヶ島台式土器である。D、E、F4・5グリッドに10点、G、H、I3-5グリッドに6点あった。このほか、縄文時代前期とみられる口縁に刻みを有する土器片が2点ある。

石器で明確に縄文時代のもつと判断できるものには、石鏃1点、楔形石器4点、石核1点、スタンプ形石器1

点、磨石3点がある。

平安時代の遺物としては、黒色土器・坏、土師器・坏が各2点(破片数7点)があった。さらに、近現代のものとして、瓦器の破片9点、陶器片2点、鉄製品1点が得られている。

発掘地南西端のD6-F6グリッドに近現代と推定される炭窟1基が検出された。39×18mの長方形のプランで、長軸方向は発掘地外にさらに延長している。内部には炭が多く入っていた。

IV 旧石器時代

1 基本的分類

1) 器種分類

本遺跡から出土した石器を、中村ほか(2008)や津南町教育委員会(2000・2002)などを参照しつつ、以下の基準で分類した。

・剥片

石核から剥離された石片のうち、約20mm以上の石片。

・砕片

石核から剥離された石片のうち、約20mm未満の石片。

なお、このうち10mm以上のものについては母岩別分類の対象とした。

・ナイフ形石器

石刃や剥片を素材として素材の一部に刃潰し状の二次

加工が施されて整形された石器。

・尖頭器

礫あるいは剥片を素材とし、両側縁からの調整によって先端部が作りだされた石器。

・彫器

素材の一端に楕状剥離によって彫刻刀面を作り出した石器。

・彫器母型

彫刻刀面は作り出されていないが、これに先行する二次加工が施された石器。接器に類似するものもある。

・削片

彫刻刀面作出によって生じる剥片類。彫器の素材とな

った剥片の主要剥離面と削片の主要剥離面をもつ。

・掻器

素材の端部に連続する急角度な二次加工が認められる石器。

・削器

素材の側面に二次加工が認められる剥片のうち、二次加工が側縁の2分の1以上に及び、また二次加工が連続的に施された石器。

・石刃

長さが幅の2倍以上で、両側縁および後縁が平行な剥片。

・二次加工のある剥片

素材の一部に二次加工が認められる剥片のうち、削器の条件を満たさない石器。

・石核

石器の素材となる剥片を剥がした痕跡をもつ石塊。

2) 石材・母岩別分類

本遺跡で使用されている石材には、安山岩、チャート、玉髄、黒曜石、頁岩、凝灰岩などがある。各石材の中には色調、肌理、流理構造、剥皮面、風化の度合いが極めて類似する一群が認められた。そこでこれらの諸特徴をもとに、母岩別分類を行った。ただし異なる母岩別資料に分類したのも、同一の母岩別資料である可能性は残っており、以降の分析においても上記の制約が存在することは確認しておきたい。

分類作業の結果、安山岩は29母岩、チャートは11母岩、玉髄は8母岩、下呂石は1母岩、黒曜石は23母岩、頁岩は40母岩、凝灰岩は45母岩に分類し、それぞれ上記の母岩以外に単独資料を含んでいる。なお黒曜石と頁岩には全面が焼熱し、母岩別分類が不可能であった石器が含まれている。

2 資料の分離

1) 石器群の分類

上ノ原遺跡(第2次・町道地点)では、大きくみてナイフ形石器と尖頭器が出土し、それぞれ多様な形態のものが出土している。これまでの調査・研究で隔年代的異なる時期に属する可能性が指摘されている複数の指標的石器が出土しており、かつそれらが部分的に重複して出土している。図9に本遺跡から出土した全石器資料とナイフ形石器、神山型彫器、尖頭器の分布を示した。おおむねナイフ形石器や神山型彫器は調査区北西側に、尖頭器は調査区南東側に分布するものの、その境界部分では重複して出土しており、視覚上有意なまとまりを見出すことが難しい状況にある。このため調査成果の報告にあたっては、報告する「単位」の設定の方法について検討する必要がある。

報告や分析の単位を設定する方法は、その方法論的検討やその妥当性の評価の仕方に関する議論が近年活発になりつつある(五十嵐1999・2000、藤田2007、山岡2007、岩瀬2008)。過去の出来事を忠実に復元しようとする立場に立てば、これらの出来事を反映する単位を設定することが理想的である。だが分解能がそれほど良好ではない遺跡においては複数の時期の人類活動の痕跡を

「理想的な単位」に解体・設定することが困難である。そこで現状では少なくとも、以後の再検討を可能にするために、資料の分類方法や報告・分析上の単位を如何に設定したのかを明示することが重要だといえる(五十嵐1999・2000・2002)。

また本遺跡から出土したナイフ形石器の中には「杉久保型ナイフ形石器」だけでなく、二側縁加工や一側縁加工のもの、あるいは小形のものなど多様な形態が認められる。近年の津南町の調査成果が示すように、神山型彫器に「杉久保型ナイフ形石器」だけでなく、小形のものなど多様な形態のナイフ形石器が伴う点が明らかになっている(津南町教育委員会2005)。こうした諸点を鑑みると、本遺跡から出土しているナイフ形石器を、その形態的特徴をもとに安易に複数の石器群に分離することは難しい状況にあるといえるだろう。

以上に示した研究の現状と本遺跡の出土状況を鑑み、本報告では「ナイフ形石器群」、「尖頭器石器群」、「縄文時代の石器」に大きく分類した上で、以下の手順に従って遺跡出土石器の分類を行った。

①指標的石器から「ナイフ形石器群」、「尖頭器石器群」、「縄文時代の石器」の3つの分類枠を設定す

る。

②遺跡出土の礫を除いた全石器を石材ごとに分類する。その後、10mm未満の破片を除き各石材で色調・肌理・流理構造などを手がかりに母岩別分類を行い、母岩別資料を設定する。

③各母岩別資料に含まれる石器の製作技術上の特徴から、①で設定した3つの石器群に各母岩別資料を分類する。

この結果、全3489点の出土石器のうち、ナイフ形石器群が1188点、尖頭石器群が1578点、帰属不明が713点、縄文時代の遺物が10点となった。

しかし、一方でこの分類方法には以下の問題点が挙げられる。

- a：予め設定した3つ以外の石器群が存在する可能性を排除できない。
- b：製作技術上の特徴が乏しい母岩別資料の帰属を判断することが困難である。
- c：ナイフ形石器群、尖頭石器群ともに、より下位の分類の可能性が当然予想できる。

こうした問題を短期的に克服することは難しく、今後こうした課題解決を念頭にした研究・分析を蓄積していく必要がある。

2) 遺物分布の検討と報告の単位

旧石器時代の遺跡では、石器や礫が数mの範囲でまとまった出土を見ることがある。特に多数の破片や破片で構成されるこうしたまとまりは、実験研究により、石器製作に伴い形成された可能性が考えられる (Newcomer and Sieveking1980、阿子島1985、佐藤1986、岡澤2000など)。

日本の旧石器時代研究では、このような視覚的なまとまりを、スポット、ブロック、ユニット、または遺物集束として記述してきた。特にブロックやユニットといった概念には当時の出来事を想定した定義付けがなされているが (大塚・戸沢編1996)、実際の遺物の出土状況に対し、これらの定義に即して分布範囲を決定することは極めて難しい (津南町教育委員会2002)。そこで本報告では、スポット、ブロック、ユニットという用語を用いず、石器集中部という用語を用いることとした (五十嵐1998など)。

またこの石器集中部の設定も報告・分析の単位として

再現性のある方法を採用することが望ましい。これまで任意に設定した半径を基準として報告・分析単位を設定する方法が示されている (五十嵐・関根ほか編1992など)。これは再現性をもった単位設定の方法ではあるものの、任意に設定した半径の規模によってその後の分析の対象となるかどうか規定されてしまうという問題点をもつ (津南町教育委員会2002)。また、遺物の密集度は発掘時の回収精度だけでなく、石器製作の規模や頻度に一部規定されると考えられる。例えば上ノ平遺跡A・C地点で明らかになったように (新潟県教育委員会1994・1996)、「杉久保型ナイフ形石器」などを伴う石器群では石器製作の痕跡をほとんど残さない地点もあり、その結果、遺物の密集度が相対的に疎となる。こうした点を鑑みると、複数時期の多様な遺物が出土し、それらを有意に分離することが難しい状況では、任意の半径をもって単位を設定する方法は、多様な時期、多様な規模の石器製作痕跡を均一的に扱うことになり、そうした痕跡を解析的に理解しようとしたとき、あまり適していない可能性がある。

こうした有効性と問題点を鑑みるとき、上ノ原遺跡 (第2次・町道地点) では、複数時期の遺物群が複雑に分布していることが予想され、また相対的に密集した石器集中部をいくつか形成しながらも、むしろこうした石器集中部同士の間を、散漫な遺物分布が認められる (図8、10、19)。そのため本報告では任意の半径を設定して石器集中部の認定を行うのではなく、便宜的ではあるものの発掘グリッドごとに区分して報告を行う方法を採用する。このため、本報告書上では明確な範囲をもった石器集中部を設定せずに、相対的により密集して石器が出土している部分を石器集中部として呼称する。

今後、多様な要因によって形成された可能性が考えられる本遺跡の石器群を対象に、より解析的な分析を行なうことで、遺跡形成のプロセスを紐解いていく必要がある。

なお本報告では垂直分布をほとんど考慮せずに分析を行なっている。これまでの当該地域における調査結果で明らかになっているように、層厚が南関東などに比べると極めて薄い状況にあり、出土資料の分離の際に大きな手がかりにならない可能性が高いためである。垂直分布を含めた検討は別の機会に改めて行いたい。

3 ナイフ形石器群

1) 概要

総点数は1188点で発掘区の西側に広く分布する(図10)。先述したように、本遺跡からは「杉久保型ナイフ形石器」と理解可能な基部と先端部を加工したものや、二側縁加工のもの、一側縁加工のものなど多様な形態のナイフ形石器が出土している。「杉久保型ナイフ形石器」にどのような形態のナイフ形石器が伴うのかという点については、隔年研究も絡み、近年多様な見解がだされている(沢田1996、立木1997、森先2004、加藤2008など)。本石器群の平面分布の傾向をみると、幾つかの石器集中部が認められるものの、これらの石器集中部の間にも遺物が認められ、概ね散漫に分布していることがわかる。これらの石器群が1回の契機で残されたとは想定しがたく、複数回の占拠とそれに伴う多様な活動の痕跡が重複し、そしてその後の埋没過程や埋没後の人為・非人為的な多様な要因によって改変され、発露された結果の分布であると考えられる。そのため、明快な報告上の「単位」を設定することが難しい状況にあり、「杉久保型ナイフ形石器」に伴うナイフ形石器の形態のバラエティについて検討するにはあまり適してはいないといえる。

大まかな傾向としては、F-2グリッドとHライン、Jラインから出土するナイフ形石器は小形で一側縁加工や二側縁加工のものが多く出土している。一方、これら以外のグリッドから出土するナイフ形石器の多くは「杉久保型ナイフ形石器」と判断可能な資料である。出土しているナイフ形石器の半数以上を「杉久保型ナイフ形石器」が占め、43点もの神山型影器が出土している点を踏まえるならば、本石器群の圧倒的多数はいわゆる「杉久保型群」と理解して問題ないと考えられる。ただし注意すべき点として、近年の津南町の調査成果によって、神山型影器の小形で不定形ナイフ形石器が伴う点が明らかになりつつある(津南町教育委員会2005)。冒頭の問題も含め、石器群の「単位」を設定する際には注意が必要だと考えられる。こうした諸点を踏まえ、本報告では細分した「単位」を設定することは避け、「ナイフ形石器群」として包括して報告する。

なお石器群の分布の特徴として、全体的な分布が北東—南西方向に分布する傾向が認められる(図10)。後述

するように接合資料の分布関係も同様な方向性を示しており、極めて示唆的である。

2) 器種組成・分布

ナイフ形石器群として抽出した資料は合計1188点で、ナイフ形石器38点、搔器1点、削器6点、影器103点、影器母型20点、削片56点、楔形石器1点、石刃307点、剥片517点、砕片105点、石核32点、敲石2点となる。

石材別にみると安山岩267点、チャート104点、玉髄2点、下呂石9点、黒曜石127点、頁岩160点、凝灰岩519点となる。出土点数としては凝灰岩が最も多く約半数を占め、2番目に多い安山岩を足すと6割半以上を占める。母岩別資料ごとにみると、安山岩は10母岩と単独資料で、チャートは6母岩と単独資料、玉髄は単独資料で、下呂石は1母岩と単独資料、黒曜石は9母岩と単独資料、頁岩は10母岩と単独資料、凝灰岩は24母岩と単独資料で構成される(表3)。

遺物分布をみると発掘区に広く分布する一方で、E-5、G-3、G-5グリッドに、相対的に他よりも遺物がより密集している箇所が認められる(図10)。そこで、DEF-456(図11、14)、FGH-234(図12、15)、FGH-456(図13、16)の4つのグリッド群とその他(図9)に分けて分布傾向を検討する。

DEF-456グリッド群

E-5グリッド中央部に石器集中部が認められる(図11)。器種別の分布をみると、この集中部はナイフ形石器、影器、影器母型、削片、石刃、剥片・砕片で構成される。ナイフ形石器は黒曜石製で、先端部と基部側の両側縁に二次加工が認められる(225)。母岩別資料の分布をみると、AN-4を中心にTU-8やOB-8によって構成されていることがわかる(図14)。後述するようにAN-4の石刃や剥片、石核が計7点接合する例(接合資料76)も当石器集中部から得られており、相対的にまとまりのある集中部と理解できよう。

なお、E-4・F-4グリッドに分布する石器には、E-5グリッドの石器集中部に関連するものと、より北東側の遺物群と関連するものとの両者が混在していると考えられる。またE-5グリッドの石器集中部にはほと

んどナイフ形石器が分布しないが、E-4・F-4グリッドの境界部分や、E-3やF-3グリッドの南側にはナイフ形石器がやや密集して出土している。

FGH-234グリッド群

石材や形態の上で多様なナイフ形石器が出土しており、石器群の単位性を判断することが難しい調査区である(図12)。大まかな分布傾向としてはG-3グリッドに石器集中部が認められ、F-3・F-4・G-4・H-3・H-4グリッドにも広く石器が分布している。

G-3グリッドの石器集中部の器種別分布をみると、ナイフ形石器、彫器、彫器母型、削片、石刃、剥片で構成されている。とりわけ注目すべきはG-3グリッドに多数の神山型彫器が分布し、石器集中部の中心から出土しているナイフ形石器(1143)が極めて小形でかつ一側縁加工のものである点である。母岩別資料の分布ではTU-8が多数分布し、その他にAN-5やCH-3、SH-24が少数出土している(図15)。なおSH-24はG-5グリッドに多数分布している。

F-3・F-4・G-4・H-3・H-4グリッドの器種別の分布をみると、G-4グリッドに石核が7点出土し、グリッド南側には削片が多数出土している。その他、彫器、彫器母型、石刃が広く分布している。母岩別資料の分布をみるとTU-8が当グリッド群に広く分布している。

なお、ナイフ形石器の形態としては、F-2グリッドの319やH-3グリッドの1959、2039、H-4グリッドの2310はどれも小形で二側縁加工のナイフ形石器であり、それ以外のナイフ形石器は「杉久保型ナイフ形石器」の範疇で理解可能なものである。

FGH-456グリッド群

G-5グリッド中央に遺物集中が認められる(図13)。この集中部の器種別の分布をみると、ナイフ形石器、彫器、削片、石刃、剥片、石核で構成されている。母岩別資料の分布をみると、AN-24、SH-24、TU-2が集中して分布していることがわかる(図16)。とりわけSH-24には10点の石刃・剥片が接合する例(接合資料7)が含まれており、比較的まとまりのよい集中部と考えられる。

この集中部に分布するナイフ形石器の形態としては1555や1719は「杉久保型ナイフ形石器」として理解可能で、1540と1810は一側縁加工あるいは二側縁加工のナイフ形石器である。その他、G-5グリッド北西隅に出土

している彫器は神山型彫器である。

なお当グリッド群北側の3グリッドについては前項で触れているため、そちらを参照されたい。

その他

前項までの記載に漏れてしまったが、E-3グリッドからもナイフ形石器や彫器、石核が出土している(図10)。

その他、I・J・Kラインに散漫に石器が分布している。特にJ-3、J-5グリッドからは下呂石製のナイフ形石器(3292・3340)が出土している。同じく下呂石製の石器はH-4・I-4周辺から出土し、合計で9点確認されている。またJ-5・K-4・K-5グリッドからはチャートや凝灰岩製の石核が出土している。

3) 碎片との関係

母岩別分類が困難であった碎片(10mm未満)の石材別の分布を図31に示した。EFGH-3456グリッド群には尖頭器石器群も分布しており、ナイフ形石器群に伴う蓋然性の高い碎片を指摘することは難しい状況にある。強いて指摘するならば、G-3グリッドに分布する凝灰岩やチャートの碎片は、このグリッドに分布するTU-8やCH-3・5に伴うものと考えられ、ナイフ形石器群に帰属する可能性が高いものと考えられる。

4) 遺物解説

ナイフ形石器

総点数は38点で、石材別にみると安山岩2点、チャート3点、下呂石2点、黒曜石12点、頁岩3点、凝灰岩16点となる(表3)。凝灰岩と黒曜石で7割を占める。完形のものには13点で、残りには何らかの欠損部位が認められた。新潟県教育委員会(1994)や津南町教育委員会(2000)を参考に、以下の要領で分類を行った。

I類: 基部に加工を施したもので、素材打面を残さないもの。

II類: 基部に加工を施したもので、素材打面を残すもの。

III類: 側縁部先端に加工を施し、基部側を欠損するもの。

IV類: 素材剥片の一側縁と片側基部を加工したもの。二側縁加工に相当し、素材打面を残さないもの。

V類: 素材剥片の一側縁と片側基部を加工したもの。二側縁加工に相当し、素材打面を残すもの。

VI類：その他（一側縁加工など）

分類の結果、I類14点、II類2点、III類8点、IV類9点、VI類5点となりV類は認められなかった。この内34点を図化した。

I類のうち、416、558、616、1719、2422は完形で、残りは基部片である。基部加工の状態から分類したため2422もI類に分類しているが、極めて小形でその他のI類のナイフ形石器とは大きく異なる。なお779はIII類の421と接合し完形となる。999の右側縁には折れ面から生じた彫器状の剥離痕が認められる。

II類の2点（374、1188）はともに基部片である。1188は比較的厚手の黒曜石製の石刃を素材にしている。

III類は多数出土している。58、225、1281、1555など比較的大きく残存しているものが多数認められる。49の先端部には、彫器状の剥離痕が認められ、1281の左側縁にも折れ面から生じた彫器状の剥離痕が認められる。これらは衝撃剥離痕の可能性が考えられる（御堂高1996）。先端部の二次加工の性状を踏まえると、おそらくI類やII類の基部側を欠損した一群と理解できよう。

IV類に分類した9点は、素材剥片の形状と大きさに注目すると、長狭な石刃を素材とした大形の一群（76、114、944、1941）と寸詰まりの剥片を素材とした小形の一群（319、1810、2309、2310、2660）に細分可能である。前者は津南町下原I遺跡（津南町教育委員会2000）など複数の遺跡で基部加工のナイフ形石器（I類やII類）と共に出土することが確認されている。一方、後者の小形の一群と基部加工のナイフ形石器との関連については詳細な検討が必要であろう。

上記以外のナイフ形石器を含むVI類の多くは一側縁加工のナイフ形石器である。1143、1959、3340など小形で寸詰まりの剥片を素材としているものが目立つ。

彫器

総点数は103点で、石材別にみると安山岩8点、チャート1点、黒曜石11点、頁岩17点、凝灰岩66点となる（表3）。この内28点を図化した。図化したものを中心に彫刻刀面の作出方法別に記載を行う。

44、88、91、99、133、1129、1135、1243は素材端部に背面から主要剥離面へ軽微な二次加工を施し、この剥離面を打面として側面あるいは背面側に彫刻刀面を作出したもので、神山型彫器に相当する。1129は上下両端に彫刻刀面が作出されている。なお1135は615と接合する

（接合資料54）。

22、1036、1046は素材端部を断ち切るように背面から主要剥離面へ二次加工を施し、この剥離面を打面として側面あるいは背面に彫刻刀面を作出したもので、1036、1046は上下両端にこうした彫刻刀面が作出されている。また22の右側縁には折れ面を打面とした種状剥離が施されている。

157、358、1307+1363+1368、2016は素材端部を断ち切るように、主要剥離面から背面へ二次加工を施し、これを打面として側面あるいは背面に彫刻刀面を作出したものである。1307+1363+1368は3点が折れ面で接合し、長さが20mmを超える大形の彫器である。

147、4501は先行する彫刻刀面を打面として再度彫刻刀面を作出したものである。

369は稜付石刃を素材とし、礫面を打面に側縁に彫刻刀面を作出したものである。

1998は素材の折れ面を打面として彫刻刀面を作出したものである。

328、408、615、3385はナイフ形石器を彫器へと転用したものと考えられる。折れ面を打面に側縁に彫刻刀面を作出したもの（328）、先行する彫刻刀面を打面として再度彫刻刀面を作出したもの（408）、ナイフ形石器のブランティングを打面としたもの（615）などがある。なお615は彫刻刀面の作出後も、その打面部周辺に加工を施し、1135と接合する（接合資料54）。

彫器母型

総点数は20点で、石材別にみると凝灰岩8点、頁岩6点、黒曜石3点、安山岩3点となる（表3）。この内8点を図化した。図化したものを中心に記載を行う。

120、126はナイフ形石器を転用したものと考えられる。ともに端部が掻器状の急角度な加工が施されている。143、391も端部が掻器状に加工されている。

2215は左側縁を彫刻刀面の導線となるように削器状に加工し、端部に彫刻刀打面となる軽微な二次加工を施していることから、彫器母型と判断した。2313も同様に左側縁の削器状の加工、右側縁の抉り状の加工、そして端部主要剥離面側に彫刻刀打面を作出していることから彫器母型と判断した。

削片

総点数は56点で、石材別にみると凝灰岩29点、頁岩12点、安山岩10点、黒曜石5点となる。この内4点を図化

した。

1251や1425は素材剥片の背面側も大きく取り込み、かつ打面に軽微な二次加工が認められることから、神山型彫器などから剥離された削片と考えられる。

削器

総点数は6点で、石材別にみるとチャート2点、黒曜石2点、安山岩1点、下呂石1点となる(表3)。この内4点を図化した。

2400は下呂石製で左側縁に連続的な二次加工が認められる。なお下端部はやや抉り状に加工され、この二次加工を打面として主要剥離面右側縁に彫器状の剥離が施されている点は注目される。

2590は礫面が大きく残る剥片で、左側縁に連続的な二次加工が認められる。

2606はチャート製で、左右両側縁に連続的に二次加工が認められるが、右側縁の方がより顕著に加工されている。

2617は黒曜石製で、右側縁にブランディング状の急角度な二次加工が認められる。

播器

黒曜石製の1点のみである。図化はしていないが、周囲に二次加工が認められる。あるいは尖頭器石器群に伴う可能性も高い。

楔形石器

黒曜石製の1点のみである。図化はしていないが、上下両方向からの剥離面が認められることから楔形石器と判断した。

石刃

総点数は307点で、石材別にみると凝灰岩165点、安山岩71点、頁岩47点、黒曜石21点、チャート2点、玉髓1点となる(表3)。27点を図化した。この内13点は接合状態でも図化している。

381、444、509、1311、1372、1543、1558、2083、は大形の石刃である。444、509、2083には稜調整が認められる。また509の裏面側には石核裏面が取り込まれており、板状に近い石核の木口面から剥離された石刃と考えられる。この他13点は接合資料において解説する。

一方82、293、355、610、1632などは細石刃状の小形の一群である。こうした極めて小形の石刃はこれまで注目されてきたが(新潟県教育委員会1994など)、本遺跡でも一定量確認されている。

剥片

総点数は517点で、石材別にみると凝灰岩198点、安山岩136点、チャート80点、黒曜石41点、頁岩61点、下呂石1点となる(表3)。この内14点を図化した。この他6点の剥片は接合状態で図化している。

石刃のように両側縁および稜線が平行しながらも寸詰まりになってしまったものや、打面再生剥片、稜調整剥片などが含まれる。

石核

総点数は32点で、石材別にみると凝灰岩13点、チャート7点、黒曜石6点、頁岩3点、安山岩2点、玉髓1点となる(表3)。この内10点を図化した。

47、201、437、797、1246などの相対的に大形な石刃核と2618、1559、2326などの細石刃核状の小形の石刃核、図化はしていないが1439、2564などの寸詰まりの剥片を剥離したブロック状の石核などが出土している。その他、2239や2369のような不定形な石核も出土している。

敲石

総点数は2点で、頁岩1点、凝灰岩1点となる(表3)。2点とも図化した。

868は棒状の礫で、端部と右側面に顕著な敲打痕が認められ、平坦面が形成されている。30はやや大形の扁平な礫を素材としたもので、右側面に敲打痕が認められ、上下両端を欠損している。

5) 接合資料

49例131点の石器に接合関係を確認している。表5は本遺跡に認められた接合資料の一覧表である。ナイフ形石器群の接合資料の接合関係をみると、剥片剥離での接合や折れ面での接合が多数を占めている。このうち10例を図化した。なお接合資料4、49、50は前節の各器種の個別記載にて解説しているのでそちらを参照されたい。

接合資料7

頁岩製(SH-24)の石刃7点、剥片3点の計10点が接合した資料である。このうち剥片2点が折れ面で接合している。G-4、G-5グリッドから出土し、まとまって出土している。

作業面高(約15cm)と作業面幅(約7cm)が分かる接合資料で、上下両設の打面から打面調整や頭部調整を適宜介在させながら、連続的に石刃などを剥離しているこ

とがわかる。ただし下の打面から剥離される剥片・石刃はより寸詰まりで不定形である。また上の打面から剥離された石刃の側面観をみると、「し」の字状に湾曲したものはほとんど見当たらず、こうした石刃の形状を整える目的で、下の打面からの剥離が行われたと考えられる。こうした技術的な特徴や石刃の形状、近接して出土するナイフ形石器の形態から「杉久保型石器群」に関連する資料と考えられる。

なお、接合する石核や同一母岩の石核は発掘区内から出土しておらず、持ち出された可能性が考えられる。また同一母岩内にはナイフ形石器や彫器などの石器も含まれていない。

接合資料34

チャート製 (CH-5) のナイフ形石器1点と剥片5点が接合した資料である。F-4、G-4、H-3グリッドから出土しており、最大で10m以上離れて接合している。

剥離工程としては裏面側で上方、右斜め下方、下方などほぼ球心状に礫面を大きく除去し、その後、打面調整を繰り返しながら、ナイフ形石器の素材剥片などを剥離している。内側に接合している1347や1493などの側面観も「し」の字状に湾曲しており、剥離工程が球心状に進んでいたことがわかる。

接合しているナイフ形石器 (1969) は小形で、先端部を欠損している。右側縁基部側にプランティングが認められる。

接合資料54

凝灰岩製 (TU-8) の彫器2点 (615・1135) が剥片剥離の関係で接合している。615はナイフ形石器を彫器に転用したものである。

接合資料76

安山岩製 (AN-4) の石核1点、石刃4点、剥片2点の合計7点が接合する資料である。すべてE-5グリッドから出土し、まとめて出土している。剥離工程としては打面調整を適宜加えながら、石核の小口面を作業面として剥離が進行し、その後、石核正面と裏面からも石刃を剥離している。

接合資料84

凝灰岩製 (TU-39) の石核と石刃が接合している。石

核は極めて小形で細石刃核状を呈しており、接合する石刃も細石刃状の小形のものである。

接合資料89

チャート製 (CH-3) の剥片3点が接合した資料である。F-4、H-4、H-5グリッドから出土しており、散漫に分布している。2点は折れ面で接合しており、2枚の剥片が剥片剥離の関係で接合している。ともに縦長の剥片である。

接合資料の分布

接合資料の多くがEFGH-3456グリッド群に分布し、K-5グリッド周囲に一部の接合資料が分布している (図17)。煩雑さを選けるため、EFGH-3456グリッド群を拡大して接合資料の分布を作成した (図18)。これらの図をみて明らかに、接合資料の多くが北東—南西方向で接合し、平面分布上の接合関係に一定の方向性が認められる。また接合する距離も長く、最大で22m以上も離れた資料が接合している (接合資料19)。また先述したように、ナイフ形石器群とした遺物全体の分布も北東—南西方向の線状に分布する傾向が認められる。接合関係や遺物分布に一定の方向性が認められ、かつ接合距離も長いことを鑑みると、ブロック間で石器を持ち運ぶなどの人為的な説明だけでなく、非人為的な営力によって一部の石器が選択的に移動した可能性を考慮する必要がある。現状ではこの要因を特定する準備をしていないため、別稿を用意したいと考えている。ただし一方で、接合資料7や接合資料76のように、7点や10点の石器が接合しているにも関わらず、極めてまとまって出土している例も認められており、複合的な要因が想定される。

6) まとめ

本石器群のナイフ形石器の形態的パラエティと接合資料や遺物の分布傾向を考慮し、無理に石器群を細分するのではなく包括的な報告上の「単位」を設定した。

「杉久保型ナイフ形石器」や神山型彫器の存在などから「杉久保型石器群」が存在することは確実だと思う。今後、方向性をもった接合資料や遺物の分布傾向を形成する要因を探る中で本石器群を解析的に検討し、有意な「単位」の抽出を目指していく必要がある。

4 尖頭器石器群

1) 概要

多様な形態の尖頭器を一括して報告する。総点数は1578点で、遺物は発掘区に広く分布する(図19)。中には幾つかの石器集中部が認められるものの、これらの石器集中部の間にも遺物が認められ、概ね散漫に分布していることがわかる。当然、これらの石器群が1回の契機で残されたとは想定しがたく、複数回の占拠とそれに伴う多様な活動、そしてその後の埋没過程や埋没後の人為・非人為的な多様な要因によって改変され、発掘された結果の分布であると考えられる。

尖頭器には、両面調整、半両面調整、片面調整、部分調整など多様な調整が認められ、形態的にも幅広いものや細身のものなど多様である。例えば新潟県真人原遺跡などで特徴的に認められる部分調整尖頭器に類似したもの(418)や、縄文時代革新期にみられる大形の尖頭器(1683、2561)や柳葉形の尖頭器(1703、2588など)も認められる。極めて幅広い時期の尖頭器がここには含まれていると考えられる。ここではこれらを何らかの有意な指標によって分離し報告することが困難であるため、一括して報告することとした。ただし部分的には類似した石材や形態の尖頭器が集中して出土する地点も認められる。

2) 器種組成・分布

尖頭器石器群として分離した資料は合計1578点で、尖頭器101点、削器35点、彫器12点、削片5点、石刃24点、石核12点、剥片1105点、砕片280点、敲石3点で構成される。石材別にみると安山岩545点、チャート15点、玉髄69点、黒曜石168点、頁岩432点、凝灰岩347点、砂岩2点となる(表4)。出土点数としては安山岩が最も多く、頁岩、凝灰岩、黒曜石、玉髄、チャートと続く。安山岩と頁岩で約6割を占める。

母岩別資料ごとくみると、安山岩は17母岩と単独資料で、頁岩は28母岩と単独資料で、凝灰岩は20母岩と単独資料で、玉髄は7母岩と単独資料で、チャートは2母岩と単独資料で、それぞれ構成されている(表4)。

遺物分布をみると発掘区に広く分布するものの、F-5、6グリッド周辺、G-5グリッド、I-2グリッド

周辺、I-5グリッド周辺、K-5グリッド周辺に、相対的に他よりも遺物がより密集している箇所が認められる(図19)。そこでDEF-456グリッド(図20、24)、GHI-345(図21、25)、HIJ-123(図22、26)、JKL-345(図23、27)の4つのグリッド群と、その他(図19)に分けて分布傾向を検討する。

DEF-456グリッド群

F-4やF-5グリッド東側では遺物が散漫に分布しているものの、E-5、E-6、F-5、F-6グリッドの境界部分には多数の遺物が密集して出土している。

器種別の分布をみると(図20)、E-5、E-6、F-5、F-6グリッドの境界部分の密集域には剥片が集中し、尖頭器4点、削器1点、彫器1点、石刃6点、石核1点などがこの周囲に分布している。母岩別資料の分布をみると(図24)、この遺物集中部はSH-1、SH-4、TU-1などを中心に構成されていることがわかる。なお、SH-1とTU-1とした資料はDEF-456グリッド群だけでなく、GHI-345グリッド群からも出土し、両グリッド群間で多数の接合資料が得られている。

一方、F-4やF-5グリッド東側の散漫な分布域の器種別の分布をみると、尖頭器、削器、彫器、削片、石核などが分布している。母岩別資料の分布をみると、TU-1やCL-1などが部分的にまとまって出土していることが見て取れる。

本グリッド群から出土した尖頭器の形態には、両面調整、半両面調整、片面調整、部分調整など多様な形態のものが出土している。とりわけ本グリッド群の特徴は418、789、878などの縦長剥片や、625、962などの小形の剥片を素材とした半両面や部分調整の尖頭器と、両面調整の尖頭器が近接して出土している点にある。後述するように接合資料13にみられる剥片剝離の特徴もあわせて考えると、新潟県真人原遺跡(小野瀬1997・2002・2006)や同遺下遺跡(長沢・山本・安部1997)、長野県上ノ原遺跡(第5次・県道地点)(中村ほか2008)のIVC石器群などの資料に類似する一群が出土しているものと考えられる。

GHI-345グリッド群

G-5グリッド中央に剥片や尖頭器、削器、彫器、石

刃などで構成される石器集中部と、I-5グリッド北西部に剥片や尖頭器、削器で構成される石器集中部が部分的に認められるもの、おおむね広く散漫に遺物が分布していることがわかる(図21)。その他の尖頭器や削器、彫器などの石器も集中部を形成することなく散漫に分布している。

母岩別資料の分布をみると(図25)、G-5グリッドの石器集中部はSH-7を中心として、I-5グリッドはTU-10を中心として構成されていることがわかる。また、SH-1がH-5およびその周辺から、SH-9がH-5北部から、TU-1がH-3からまともに出土する傾向も認められる。一方で、その他の多くの母岩は広く分布している。

本グリッド群から出土した尖頭器の形態には、両面調整、半両面調整、部分調整など多様な形態のものが出土している。個別的にみると1088、1191、2298などの部分調整尖頭器、1531、1693、2561などの大型の尖頭器や1800などの大形の尖頭器の調整剥片、1703、2229、2549、2588、2861、2914、3012、3036などの柳葉形の尖頭器が出土している。なおG-5グリッド周囲には安山岩製の柳葉形の尖頭器がまとまる傾向が認められる。

またG-4グリッドから出土したSH-1や、H-3グリッドから出土したTU-1の母岩別資料が、E-5、E-6、F-5、F-6グリッドの境界部分の資料と接合している(接合資料13・18・20)。

HIJ-123グリッド群

I-2北部およびその周辺に石器集中部が認められる(図22)。ただし、これ以北は未発掘であるため、この分布が本来の分布であるとはいえないと思われる。

器種別の分布をみると(図22)、この石器集中部は剥片や尖頭器、削器、削片、石刃で構成される。尖頭器には、両面調整(1911、2801)、半両面調整(1935)片面調整(2791)、部分調整(2731、2758)など多様なものが出土し、形態的にも尖端を石錐状に加工したものの(2801)などが出土している。

母岩別資料の分布では(図26)、AN-6を中心として構成されていることがわかる。また図にはしていないが、5点前後で構成される黒曜石の母岩別資料が多数出土している。

この他、より南側のHIJ-5グリッド群から出土した遺物については前項を参照されたい。

JKL-345グリッド群

K-5グリッドおよびその周辺に石器集中部が認められる。器種別の分布をみると(図23)、この石器集中部は尖頭器、削器、石刃、剥片、石核で構成される。尖頭器はすべて安山岩製の両面調整、半両面調整のもので構成される。母岩別資料の分布をみても(図27)、AN-18、AN-27、AN-28で構成される。このように、本遺跡の中では最もまとまりのある集中部と評価できる。その他J-4、5グリッドから黒曜石製の尖頭器3点が出土している。

その他のグリッド

K-2およびNOP-45グリッド群に尖頭器や削器、石刃が散漫に分布している(図19)。

3) 砕片との関係

母岩別分類が困難であった砕片(10mm未満)の石材別の分布を図31に示した。EFGH-3456グリッド群にはナイフ形石器群も分布しており、尖頭器石器群に伴う蓋然性の高い砕片を指摘することは難しい状況にある。ただしE-5、E-6、F-5、F-6グリッドの境界部分に分布する頁岩や凝灰岩製の砕片は、SH-1やTU-1に伴う蓋然性が高く、尖頭器石器群に帰属するものと考えられる。I-2グリッド周辺に分布する黒曜石、安山岩製の砕片や、K-5グリッド周辺に分布する安山岩製の砕片も尖頭器石器群に帰属するものと考えられる。

4) 遺物解説

尖頭器

総点数は101点で、石材別にみると安山岩31点、頁岩29点、凝灰岩18点、黒曜石17点、玉髄4点、チャート2点となる(表4)。安山岩と頁岩によって半数以上が占められる。完形状態のものは19点で、残りの82点には何らかの欠損部位が認められた。

これまで行われている分類をもとに(白石1989、小野瀬1997・2002・2006など)、①両面調整、②半両面調整、③片面調整、④部分調整として分類し報告する。

両面調整の尖頭器は46点出土し、内3点が接合して1個体となるため、合計44個体となる。この内29個体を図化した。ここでは図化したものを中心に記載を行う。

両面調整の尖頭器は大きく分けて、大形で幅広なもの(1531、2561、3473、3476、1096+1304+2007など)、細

身のもの(404、1294、1574、1605、2476、2595、2596など)、柳葉形のもの(1703、2588、2914、3036など)がある。

404は頁岩製で、ほぼ完形である。

619は玉髓製で、両端ともに丸みを帯びている。左側縁の一部が被熱により欠損している。

654は黒曜石製で、基部あるいは先端部のみが残存している。

1096+1304+2007は凝灰岩製の尖頭器3点が接合したもので、ほぼ完形になる(接合資料48)。器体中央部の1096の正面には、折れた後の再加工の痕跡が認められる。

1270は黒曜石製で、一端を欠損している。

1357は凝灰岩製で、先端部をガジリにより欠損している。また反対側の端部は折れによって欠損しているものの、その折れ面を切る再加工によって、搔器状の急角度の調整が施されている。

1387は玉髓製で、下端に抉り状の急角度の調整が認められる。おそらく1357と同様な、折れ面などへの再加工の結果と考えられる。

1574は凝灰岩製で、両端部を欠損している。下端は節理面で折れ、上端には彫器状の剥離痕が認められる。衝撃剥離と考えられる(御堂島1996など)。

2476はチャート製で、一端を欠損している。めくれるように折れており、衝撃剥離による可能性が考えられる。

2561は頁岩製で、一端を欠損している。幅広で大形であったと考えられる。

2588は安山岩製で、両端を欠損している。上端はめくれるように折れている。一方下端部裏面側には、折れ面からの細かい剥離が認められる。

2801はチャート製で、先端部が断面三角形となり、石錐状を呈している。

2914と3036は凝灰岩製で、ともに柳葉形を呈する。著しく風化している。

半両面調整の尖頭器は21点出土し、この内10点を図化している。

101は頁岩製で、先端部を欠損している。裏面側にはこの折れ面を切る再加工が認められる。

789は頁岩製で、一端はめくれるように欠損している。縦長剥片を素材とした長狭な尖頭器である。

878は頁岩製(SH-1)で、一端を欠損している。

1319は凝灰岩製で、一端を欠損している。縦長剥片を素材としている。

1360は黒曜石製の完形品である。側面観が湾曲した縦長剥片を素材としている。

1423は黒曜石製で、一部欠損している。小形の横長剥片を素材とし、正面に礫面を大きく残す。

1693は安山岩製で、大形の横長剥片を素材としている。

2598は頁岩製で、縦長剥片を素材とする。断面D字形で、下端部は搔器状を呈している。

3469は安山岩製で、横長剥片を素材とする。

3646は黒曜石製で、横長剥片を素材とする。断面D字形を呈する。

片面調整の尖頭器は8点出土し、この内6点を図化している。

13は頁岩製で、一端を欠損している。背面には主要剥離面と反対方向からの剥離面と、右側方からの剥離面が認められる。

867は黒曜石製の完形品である。縦長剥片を素材とし、表面側の全面に調整が認められる。断面D字形を呈する。

1262は凝灰岩製で、一部にガジリによる新しい欠損が認められる。両側縁には急角度な調整が認められ、断面D字形を呈する。

2791は黒曜石製で、断面D字形を呈する。左側面に平坦面が認められるが、この面は調整によって切られている。なお、ほぼ全面にガラス光沢を消失しており、顕微鏡下で観察すると格子状のクラックが認められる。被熱によるものと考えられる。

2840は安山岩製で、縦長剥片を素材とし、断面D字形を呈する。先端部はめくれるように折れている。

3620は黒曜石製で、縦長剥片を素材とする。断面D字形を呈し、左側縁には抉り状の加工が認められる。

部分調整の尖頭器は26点出土し、この内の4点が2点ずつ接合しているため、合計で24個体となる。この内11個体を図化している。

418は頁岩製で、石刃あるいは縦長剥片を素材とする。一端を欠損している。

625は黒曜石製で、一端を欠損している。小形の縦長剥片を素材とし、左側縁はやや急角度の調整である。

962は凝灰岩製で、両側縁に軽微な二次加工が認められる。一端が欠損している。

1088は頁岩製で、縦長剥片を素材とする。

1111+1170は頁岩製で、器体半ばで折れているものが接合している（接合資料2）。

1191は頁岩製で、小形の縦長剥片を素材とする。基部側は裏面側に、先端部側は表面側に顕著な調整が認められる。

2298は頁岩製で、小形の縦長剥片を素材とする。先端部を欠損している。

2824+3103は安山岩製で、I-3とI-5グリッドから出土したものが接合する（接合資料88）。縦長剥片を素材としている。

3098は黒曜石製で、先端部を欠損している。裏面側には折れ面からの剥離が認められる。

3416は黒曜石製で、先端部を欠損している。裏面が大きく残っている。両側縁を軽微な二次加工で調整している。

3653は黒曜石製で、先端部を急角度な調整で作り出している。

なおF-4、F-6、H-4グリッドから出土する部分調整の尖頭器（418、625、962、2298）は、真人原遺跡（小野編1997、2002、2006）をはじめとする新潟県域に特徴的に認められる部分調整尖頭器に類似する。興味深いことに、この分布は接合資料13・18・20の分布域とほぼ重なっている。

搔器

1点のみ確認し、この1点を図化した。1395は頁岩製で、小形の剥片を素材としている。

削器

総点数は35点で、石材別にみると安山岩3点、玉髓3点、黒曜石4点、頁岩16点、凝灰岩9点となる（表4）。このうち10点を図化した。

422は玉髓製で、大きく欠損している。尖頭器の可能性も考えられる。

519は凝灰岩製（TU-1）で、左側縁に連続的に二次加工が認められる。

579は凝灰岩製で、縦長剥片を素材とする。裏面側右側縁に連続的に二次加工が認められる。

781は頁岩製（SH-1）で、表面側左側縁、裏面側左側縁に連続的に二次加工が認められる。たま打面部の高ま

りを二次加工によって除去している。

1308は頁岩製（SH-1）で、接合資料13に含まれる。縦長剥片を素材とし、裏面側左側縁に連続的な二次加工が認められる。

1417は頁岩製で、左側縁に連続的に二次加工が認められる。打面部にはリップの発達性が認められることを考慮すると、両面調整の石器の調整剥片と考えられる。

2345は玉髓製で、表面側の左側縁、裏面側の右側縁に連続的な二次加工が認められる。

3235は頁岩製で、表面側の右側縁に連続的な二次加工が認められる。素材剥片の背面には多方向からの剥離がみられ、両面調整の石器の調整剥片と考えられる。

3250は頁岩製で、先端部に抉り状の連続的な二次加工が認められる。

彫器

総点数は12点で、石材別にみると玉髓5点、黒曜石1点、頁岩6点となる（表4）。このうち7点を図化した。

604は頁岩製で、縦長剥片を素材とする。折れ面を打面として両側縁に楕状剥離を施している。

647は玉髓製で、削片（544）と接合する（接合資料1）。部分調整の尖頭器の折れ面を打面として、右側縁に楕状剥離を施している。同様な特徴をもつ彫器の一群が上ノ原遺跡（第5次・県道地点）から出土している（中村ほか2008）。

1247は頁岩製（SH-1）で接合資料13に含まれる。折れた縦長剥片の折れ面を打面として、右側面に楕状剥離を施している。1347とは折れ面で接合する。

1374は頁岩製（SH-1）で接合資料13に含まれる。折れた縦長剥片の折れ面を打面として、左側面に楕状剥離を施している。また、この楕状剥離の後に、裏面側から連続的な二次加工を加えている。楕状剥離の打面部にできた「ひさし」を除去したものと考えられる。1247とは折れ面で接合する。

1684は玉髓製で、折れ面を打面として楕状剥離を連続的に加えている。左側縁には連続的な二次加工が認められる。折れた部分調整尖頭器を素材としていていると考えられる。

2329は頁岩製で、横長剥片の先端部に相当する部位に楕状剥離を施している。

剥片

総点数は5点で、石材別にみると玉髄2点、頁岩1点、凝灰岩2点となる(表4)。このうち1点を図化している。

544は玉髄製で、彫器(647)と接合する(接合資料1)。部分調整の尖頭器の折れ面を打面として、剥離されている。同様な特徴をもつ彫器の一群が上ノ原遺跡(第5次・県道地点)から出土している(中村ほか2008)。

石刃

総点数は24点で、石材別にみると安山岩1点、玉髄2点、頁岩4点、凝灰岩17点となる(表4)。図化はしていないが、ナイフ形石器群の石刃のように形態的に整ったものは少ない。おそらく目的的に剥離したものを以外に、石核が縮小する過程でたまたま剥離されたものも含んでいると考えられる。

剥片・砕片

総点数は1385点で、安山岩504点、チャート12点、玉髄53点、黒曜石146点、頁岩372点、凝灰岩298点となる(表4)。このうち二次加工や微細剥離のある剥片、特徴的な剥片12点を図化した。

646は頁岩製で、やや幅広な剥片の右側縁に二次加工が認められる。

1302は頁岩製で縦長剥片の周囲に断続的に二次加工あるいは微細剥離痕が認められた。背面には左右両方向からの剥離痕が特徴的に認められる。

1765は頁岩製(SH-1)で、接合資料13に含まれる。打面部周辺および左右両側縁に二次加工が認められ、右側縁は急角度に調整されている。

1800は頁岩製で、大形の両面調整尖頭器の調整剥片である。尖頭器の一端を大きく取り込んでいる。表面側の右側縁や表面側主要剥離面の両側縁に二次加工が認められる。尖頭部を作り直そうとした可能性も考えられる。

1859は頁岩製で、背面には主要剥離面と反対方向からの剥離面や、右側方からの剥離面が認められる。

2169は頁岩製で、背面には右側方からの剥離面が認められる。打面部には大きくリップが発達している。右側縁と左側縁に二次加工や微細剥離痕が認められる。

2469は頁岩製で、背面には主要剥離面と平行する剥離面が認められる。左右両側縁に微細剥離痕が認められる。

石核

総点数は12点で、安山岩6点、頁岩3点、凝灰岩3点となる(表4)。図化はしていないがサイコロ状のものや、剥片素材の石核など不定形なものを多く含んでいる。また両面調整石器状のものも含む。

敲石

総点数は3点で、砂岩2点、チャート1点となる(表4)。3点とも図化した。

910と975はともにF-6グリッドから出土し、類似した特徴をもつ。棒状の礫で、端部に顕著な敲打痕が認められ、平坦面が形成されている。910は上下両端に敲打痕が認められるが、下端がより顕著で、上端はより軽度である。975は一端を欠損している。

5) 接合資料

41例98点の石器に接合関係を確認している(図28)。表5は本遺跡に認められた接合資料の一覧表である。尖頭器石器群の接合資料の接合関係をみると、剥片剥離での接合や折れ面での接合が多数を占めている。このうち6例を図化した。なお接合資料2・48・88は前節の各器種の個別記載にて解説しているのでそちらを参照された。ここでは図化したものを解説する。

なお、発掘区西側に接合資料の多くが分布するが、これは接合作業量の違いが大きき要因となっている。

接合資料1

玉髄製の彫器(647)と剥片(544)が接合する。部分調整の尖頭器が折れた後、折れ面を打面として棒状剥離を施している。

接合資料13

頁岩製(SH-1)の削器1点、彫器2点、二次加工のある剥片2点、剥片4点の計9点が接合する。F-5、F-6、G-4、G-5の4グリッドから出土しており、13m以上の距離で接合している(図29)。同一の母岩別資料もこの周囲に分布する。

右側縁からの石核調整(1308、899+712+906、1765)を適宜加えながら、縦長剥片(1247+1374、871+1365)を剥離していることがわかる。

接合資料32

頁岩製(SH-1)の削器1点(781)と剥片1点(159)が接合する。

接合資料の分布

接合資料の多くがEFGH-3456グリッド群に分布し、より東側の調査区では散漫に認められる(図28)。煩雑さを避けるため、EFGH-3456グリッド群を拡大して接合資料の分布を作成した(図29)。これらの図をみて明らかのように、EFGH-3456グリッド群から出土した接合資料の多くが北東—南西方向で接合し、平面分布上の接合関係に一定の方向性が認められる。同じ傾向はナイフ形石器群でも確認されている。接合関係に一定の方向性が認められ、かつ尖頭器石器群だけでなくナイフ形石器群でも類似の傾向が認められる点を鑑みると、ブロック間で石器を持ち運ぶなどの人為的な説明だけでなく、非人為的な営力によって一部の石器が選択的に移動した

可能性を考慮する必要がある。現状ではこの要因を特定する準備をしていないため、ナイフ形石器群も含め、別稿を用意したいと考えている。

6) まとめ

本石器群は多様な形態の尖頭器を含んでいる。本報告の中では個別的な「単位」を抽出することはできなかったものの、真人原遺跡などにみられる部分調整の尖頭器石器群、草創期の大型の尖頭器石器群などが含まれていると考えられる。なおK-5グリッドおよびその周辺に分布する安山岩製の尖頭器石器群は比較的まとまりのよい一群で、今後当該地域の尖頭器石器群を研究する上で重要な一群となるであろう。

5 帰属不明の石器群

1) 概要

総点数は208点で発掘区全体に広く分布する(図30)。母岩別分類の結果、含まれる石器の技術形態学的特徴が不明瞭なものがこの石器群に含まれている。本石器群の大半はおそらくナイフ形石器群か尖頭器石器群のどちらかに伴う可能性が高いと考えられる。

2) 器種組成・分布

削器1点、石核1点、剥片・砕片206点で構成され

る。石材別にみると安山岩34点、チャート21点、玉髓8点、黒曜石14点、頁岩39点、凝灰岩92点となる。図化していないか削器、石核ともに不定形のものである。

3) 接合資料

3例6点の石器に接合関係を確認している(図30)。表5は接合資料の一覧表である。剥片が折れ面で接合するものだけで構成されている。

V 上ノ原遺跡(第2次・町道地点)発掘調査の成果

遺跡・調査

上ノ原遺跡(第2次・町道地点)は、長野県上水内郡信濃町大字柏原字西岡・毛無に位置し、関川水系と鳥居川(信濃川)水系の分水嶺付近に属す。発掘場所は国道18号線と上信越自動車道の間に挟まれた丘陵部に立地し、北緯36度48分56.9秒、東経138度11分45.7秒にある。

上ノ原遺跡は1988年の柏原町区誌遺跡分布調査で発見され、北東—南西の長軸900m、幅250～500mで、面積約330,000㎡におよぶ大面積の遺跡で、1990年以降、7次にわたる発掘調査が行われており、第2次調査はこの遺跡の中では北部の地点にあたる。第1次調査地(北部

高校分校跡地地点)の南西約100mにあたる。

地層・年代

発掘地の遺物包含層は、黒土(柏原黒色火山灰層)直下の最上位のローム層である上部野尻ローム層Ⅱであり、上Ⅱ上部(Ⅳ上層)に文化層がみられる。下位の上Ⅱ最下部はAT降灰層であり、歴年未校正で約25万年前の前後、上位の上Ⅱ上部は約2.0～1.4万年前と推定される。

旧石器時代の石器群

発掘で確認された石器群は、やや形態の異なったナイフ形石器などを含むが、分離が容易でないために、ナイフ形石器群と尖頭器石器群の2石器群と認識した。本遺跡では複数時期のブロックが複雑に重複して分布していることが予想されるので、個別のブロック単位を判別できなかった。

ナイフ形石器群は、総点数は1,188点である。杉久保石器群を中心とするが、一部、異なった形態のものを保有しており、これらの所属については結論が出ていない。ナイフ形石器38点、搔器1点、削器6点、彫器103点、彫器母型20点、削片56点、石刃類307点、剥片517点、砕片105点、石核32点、敲石2点という組成である。石器完形品の中で彫器の割合が大きいことが特筆される。石材は無斑晶質安山岩267点(22.5%)、黒曜石127点(10.7%)、凝灰岩519点(43.7%)、頁岩160点(13.4%)、チャート104点(8.8%)、玉髓2点(0.16%)、下呂石9点(0.8%)、砂岩1点(0.08%)と多様である。杉久保石器群は野尻湖遺跡群では、杉久保遺跡、上ノ原遺跡(第5次・県道地点)、東裏遺跡、七ツ栗遺跡などに類別がみられる。

尖頭器石器群は、総点数は1,578点である。石材は黒曜石168点(10.6%)、無斑晶質安山岩545点(34.5%)、頁岩432点(27.3%)、チャート15点(0.9%)、凝灰岩347点(22.0%)、玉髓69点(4.4%)、砂岩2点(0.12%)などである。尖頭器101点、搔器1点、削器35点、彫器12点、削片5点、石刃24点、石核12点、剥片1,105点、砕片280点、敲石3点という組成である。真人原遺跡などにみられる部分調整の尖頭器石器群、縄文草創期の大型の尖頭器石器群などが含まれている。

縄文時代以降

縄文時代の出土品としては、縄文早期の鵜ヶ島台式土

器、前期土器が出土した。さらに、平安時代土器、近現代の炭窯などが出土した。

石器石材

上ノ原遺跡の石材は、ナイフ形石器群、尖頭器石器群ともに凝灰岩、無斑晶質安山岩、頁岩、黒曜石が主要なものである。前者では、チャート8.8%、下呂石が0.8%(9点)、後者では玉髓4.4%を含むことが特筆される。なお、下呂石が杉久保石器群に確認された例はみられないこと、ナイフ形石器の形態が杉久保型とは異なることなどから、下呂石製の石器は杉久保石器群には含まれない可能性が考えられる。

上ノ原遺跡の石器石材は、3方向のルートからもたらされたものである。南ルートは、信州系黒曜石で80～90kmの距離にあり、その途中の25km南の長野盆地の犀川―千曲川の河原で採集されたチャートがある。北東ルートとしては、新潟県中・北部が原産の頁岩、凝灰岩、玉髓など、60～150km程度の距離にあるもので、このルートの入口20～40kmの関田山地の無斑晶質安山岩が多く使われている。

このように、上ノ原遺跡のある野尻湖周辺は、北信―新潟の石器石材原産地の中核地域に立地していることが理解される。

編年・位置づけ

以上の上ノ原遺跡の石器群は、谷(2007)による編年に比較すると、ナイフ形石器群が第IV期に、尖頭器石器群が第IV期～第V期に相当するものと考えられる。上ノ原遺跡(第2次・町道地点)を代表するのは、第IV期にナイフ形石器と尖頭器の石器群がまとまって存在することである。上ノ原遺跡(第5次・県道地点)と同様に、野尻湖遺跡群の第IV期を代表する遺跡であるといえるであろう。

引用・参考文献

- 阿子尚香 1985 「石器の平面分布における静態と動態—実験的研究—」『東北大学考古学研究所報告』1 37-62
- 五十嵐彰 1998 「旧石器時代」『高屋敷遺跡』東京都改定文化財センター調査報告書第5集 13-71
- 五十嵐彰 1999 「旧石器資料報告の現状 (I)—坂下遺跡の分析を通じて—」『東京考古』17 19-32
- 五十嵐彰 2000 「文化層」概念の検討—旧石器資料報告の現状 (II)—」『旧石器考古学』60 43-56
- 五十嵐彰 2002 「旧石器資料関係論—旧石器資料報告の現状 (III)—」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』X IX 33-72
- 五十嵐彰・関根唯巳ほか編 1992 『湘南藤沢キャンパス内遺跡』第2巻 岩宿時代・縄文時代1部 慶應義塾大学
- 岩瀬 彬 2008 「大型尖頭器石器群から有茎尖頭器石器群への石器製作構造の変化に関する再検討—相模野台地とその周辺を事例に—」『論集忍路子』II 175-199
- 大家初重・戸沢光則編 1995 『日本考古学用語辞典』柏書房
- 岡澤祥子 2000 「旧石器時代研究における板根細石片の役割—石器製作実験に基づく検討—」『第四紀研究』39 479-486
- 小野昭編 1997 「新潟県小千谷市 真人原遺跡II」東京都立大学考古学報告1 真人原遺跡発掘調査
- 小野昭編 2002 「新潟県小千谷市 真人原遺跡III」東京都立大学考古学報告7 真人原遺跡発掘調査
- 小野昭編 2006 「信濃川中流域における旧石器時代の居住類型と石材環境」平成16・17年度科学研究費補助金 基礎研究C 研究成果報告書 首都大学東京都市教養学部
- 加藤 学 2008 「杉久保石器群における二種のナイフ形石器」『石器に学ぶ』第10号 69-100
- 佐藤宏之 1986 「石器製作空間の実験考古学的研究 (I)—遺跡空間の機能・構造探究へのアプローチ—」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』IV 1-41
- 沢田 敦 1996 「第X章」『上ノ平遺跡C地点』新潟県埋蔵文化財調査報告書第73集 100-110
- 白石浩之 1989 『旧石器時代の石槍 狩猟具の進歩』UP考古学選書 (7) 東京大学出版会
- 谷 和隆 2007 「野尻湖遺跡群における先土器時代石器群の変遷」『長野県歴史館研究紀要』第13号 3-21
- 立木宏明 1997 「ガラハギ遺跡B地点の後期旧石器時代前半石器群」『奥三河ダム関連遺跡発掘調査報告書VI』71-77 朝日村文化財報告書第12集
- 土屋積・谷和隆編 2000 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書、信濃町内その1、裏ノ山遺跡・東裏遺跡、大久保南遺跡、上ノ原遺跡」長野県埋蔵文化財センター
- 土屋積・中島美子編 2000 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書、信濃町内その2、星光山荘A・星光山荘B・西岡A・貫ノ木・上ノ原・大久保南・東裏・裏ノ山・針ノ木・大平B・日向林A・日向林B・セツ栗・菅光田」長野県埋蔵文化財センター
- 津南町教育委員会 2000 「下ノ原1遺跡」津南町文化財調査報告書第32輯 津南町教育委員会
- 津南町教育委員会 2002 「正西中島遺跡」津南町文化財調査報告書第37輯 津南町教育委員会
- 津南町教育委員会 2005 「町内遺跡試掘確認調査報告書 (5)」津南町文化財調査報告書第48輯 津南町教育委員会
- 長沢雄生・山本克・安部英二 1997 「遺下遺跡 1. 遺跡概要 2. 旧石器時代」平成9年度津南町遺跡発掘調査概要報告書 2-4 津南町教育委員会
- 中村由克 1988 「柏原の原始をさぐる」『長野県信濃町「柏原町区誌」』117-145
- 中村由克 1994 「1993年上ノ原遺跡の発掘」『野尻湖博物館研究報告』2.1.1.1
- 中村由克 2004 「信濃町上ノ原遺跡の杉久保系石器群」『第16回長野県旧石器文化研究交流会発表資料』15-27
- 中村由克・中村敦子 1994 「信濃町上ノ原遺跡の第2次調査」『第6回長野県旧石器文化研究交流会発表資料』26-32
- 中村山克・渡辺哲也 1996 「上ノ原遺跡 (4次) ほかに発掘調査報告書」信濃町の埋蔵文化財 信濃町教育委員会
- 中村由克・渡辺哲也 1998 「上ノ原遺跡 (7次) ほかに発掘調査報告書」信濃町の埋蔵文化財 信濃町教育委員会
- 中村山克・森先一貴・岩瀬彬・尾田謙好・川端結花・藤科哲男 2008 「上ノ原遺跡 (第5次・果遺地点) 発掘調査報告書」信濃町の埋蔵文化財 信濃町教育委員会
- 中村由克・菅沼亘・土橋由理子 2008 「上ノ原遺跡 (第1次・北部高校分校跡地点) 発掘調査報告書」信濃町の埋蔵文化財 信濃町教育委員会
- 新潟県教育委員会 1994 「上ノ平遺跡A地点」新潟県埋蔵文化財調査報告書第64集 新潟県教育委員会
- 新潟県教育委員会 1996 「上ノ平遺跡C地点」新潟県埋蔵文化財調査報告書第73集 新潟県教育委員会
- 野尻湖人類考古グループ 1996 「第12次野尻湖発掘の考古学的成果と野尻湖文化研究の現段階」『野尻湖博物館研究報告』第4号 21-40
- 藤田健一 2007 「先土器時代の複数文化層遺跡における諸問題」『土と遺跡時間と空間』予稿集 24-27
- 御堂高正 1996 「ナイフ形石器の判別実験」『神奈川考古』77-96
- 森先一貴 2004 「杉久保尖頭形石器の成立とその背景」『考古』II 41-75
- 山岡拓也 2007 「武蔵野台地における後期旧石器時代前半石器群の層位層年研究に関する諸問題」『土と遺跡時間と空間』予稿集 17-19
- Newcomer, M.H. and Sieveking, G. de G. 1980 Experimental Flake Scatter-Patterns: a New Interpretative Technique. Journal of Field Archaeology. 7 345-357

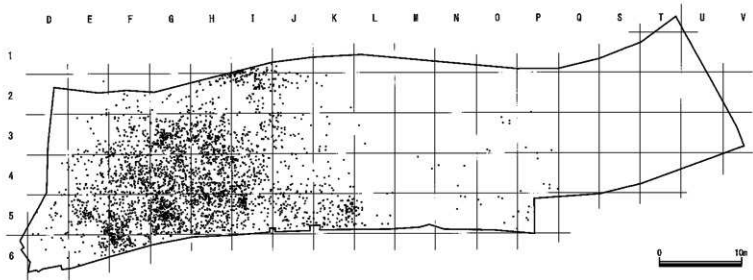


図8 上ノ原遺跡(第2次・町道地点)の発掘区と出土遺物

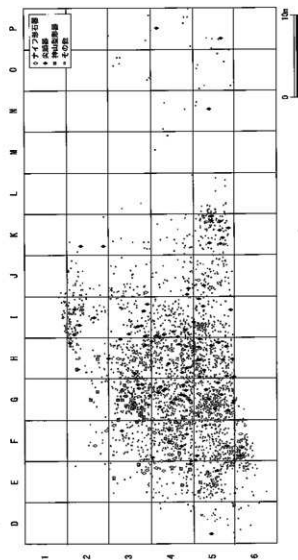


図9 ナイフ形石器・尖頭器・矛頭器の分布

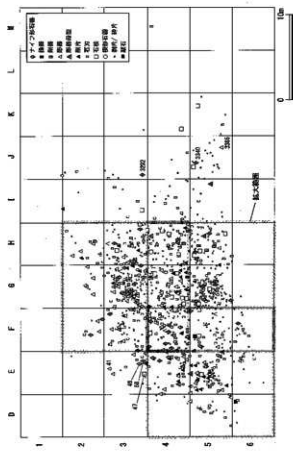


図10 ナイフ形石器の器種別分布(全標)



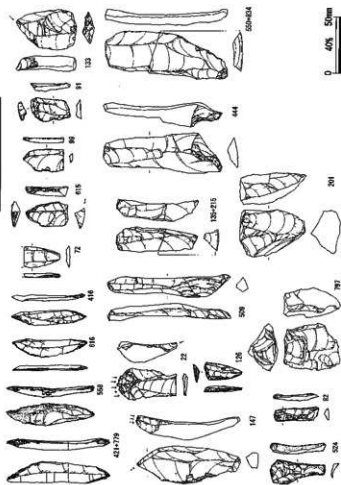
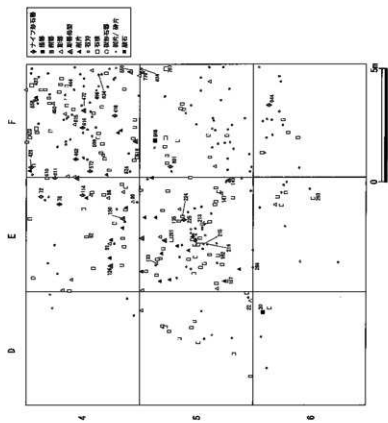


図11 ナイフ形石器群の装飾別分布 (DEF-456)

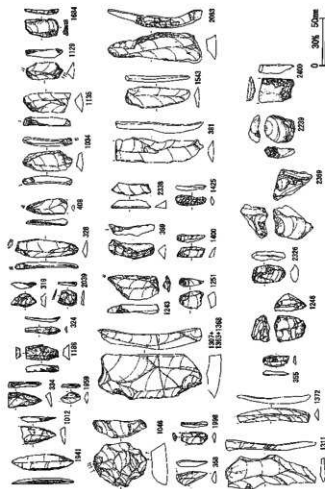
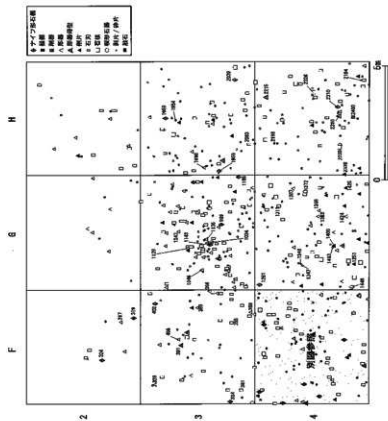


図12 ナイフ形石器群の装飾別分布 (FGH-234)

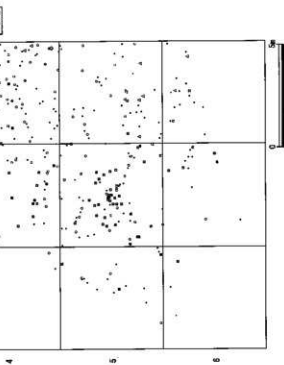


図14 ナイフ形石器群の母岩別分布 (DEF-456)

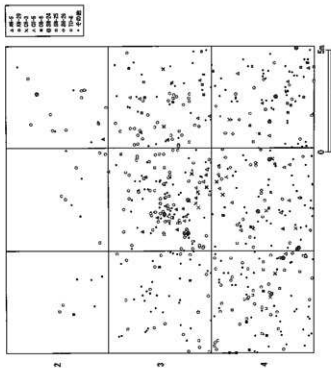


図15 ナイフ形石器群の母岩別分布 (FGH-234)

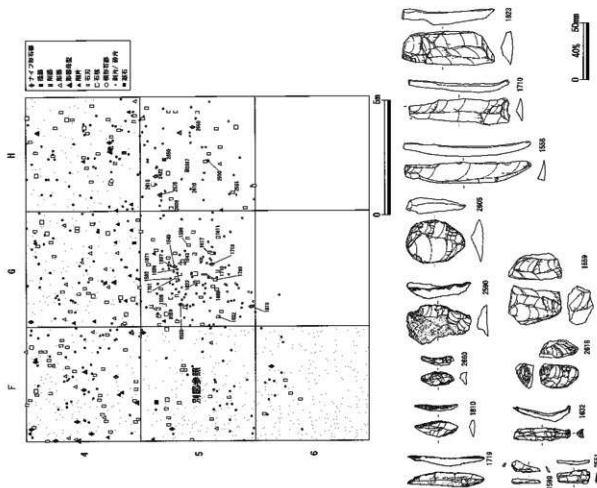


図13 ナイフ形石器群の器種別分布 (FGH-456)

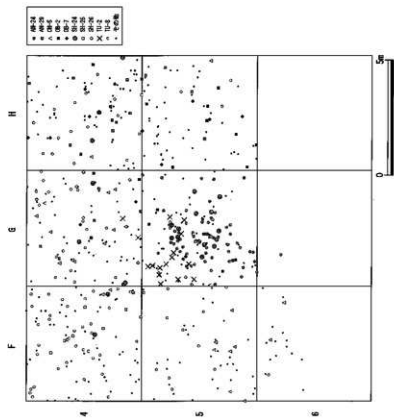


図16 ナイフ形石器群の母岩別分布 (FGH-456)

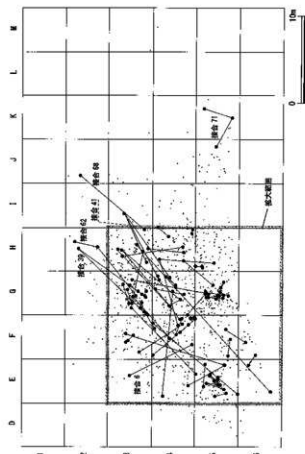


図17 ナイフ形石器群の接合資料全体図

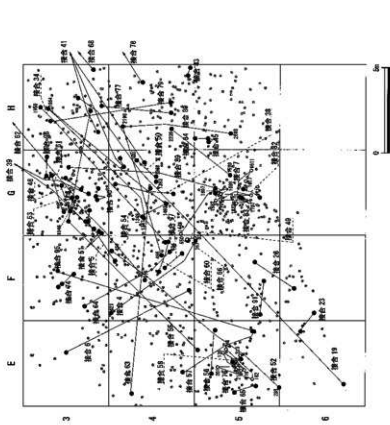
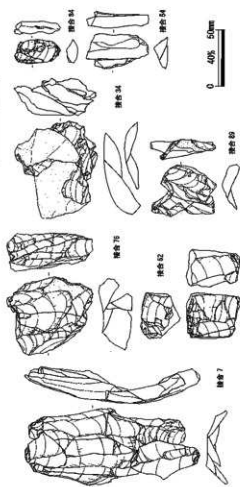


図18 ナイフ形石器群の接合資料分布 (FGH-3456)



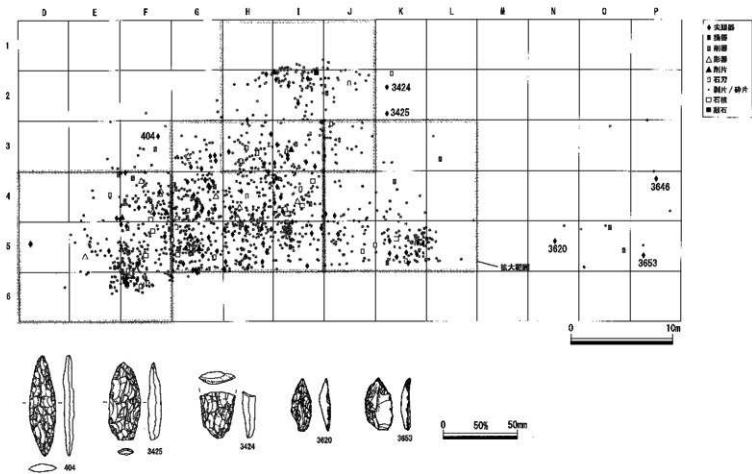


図19 尖頭器石器群の器種別分布全体図

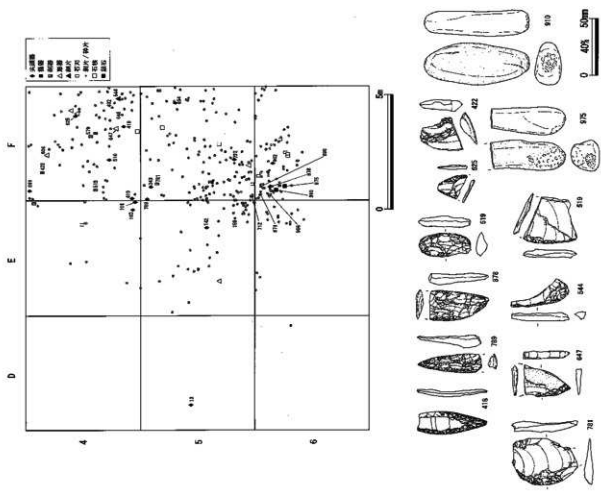


図20 尖頭器石器群の器種別分布 (DEF-456)

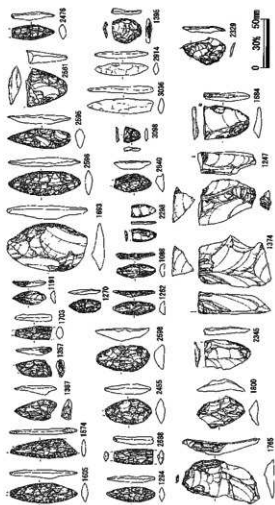
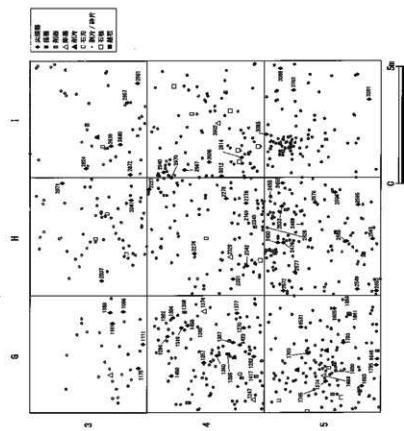


図21 尖頭器石蕊群の形態別分布 (GH-345)

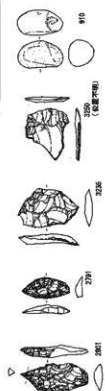
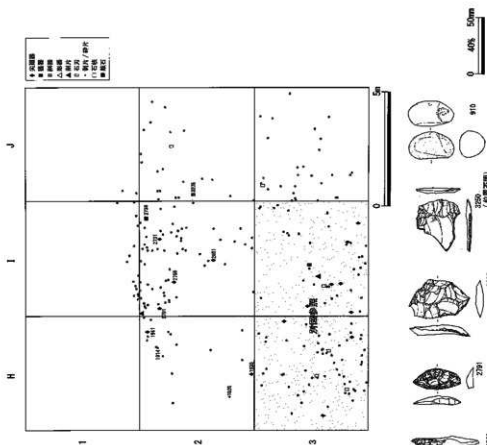


図22 尖頭器石蕊群の形態別分布 (HI-123)

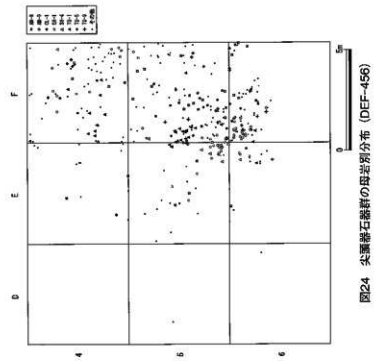


図24 尖頭器石器群の母岩別分布 (DEF-456)

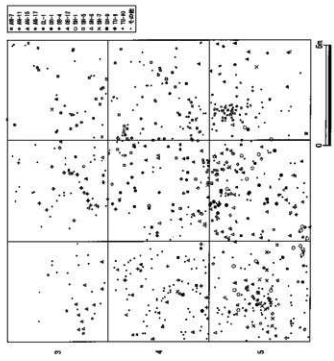


図25 尖頭器石器群の母岩別分布 (GHI-345)

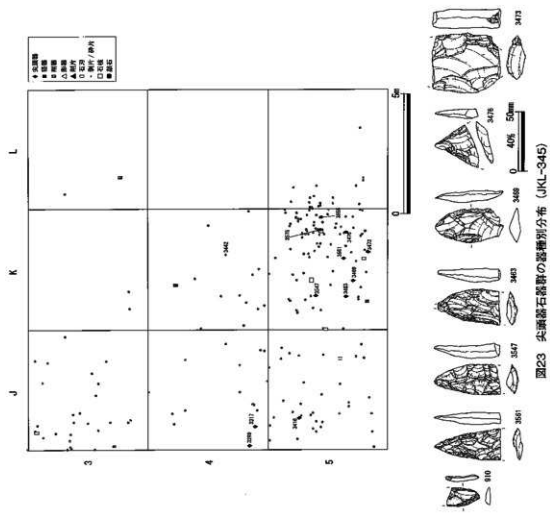
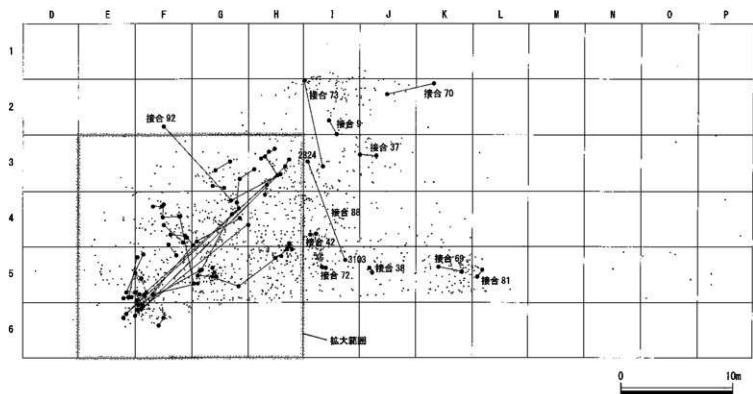
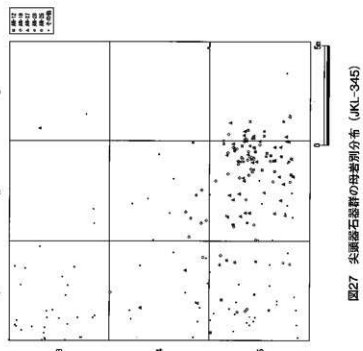
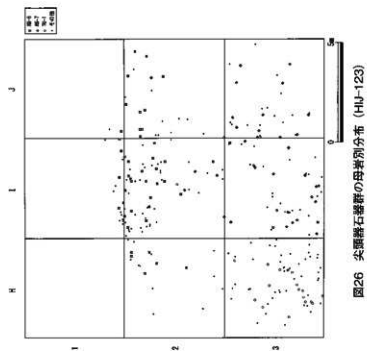


図23 尖頭器石器群の器種別分布 (JKL-345)



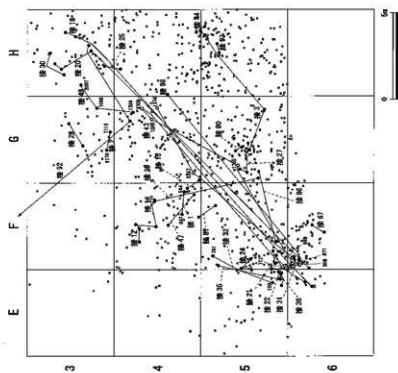


図29 尖頭器石器群の集合資料分布 (EFGH-3456)

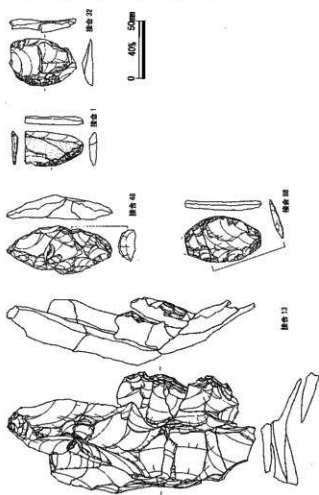


図30 帰属不明の石器群の器種別分布

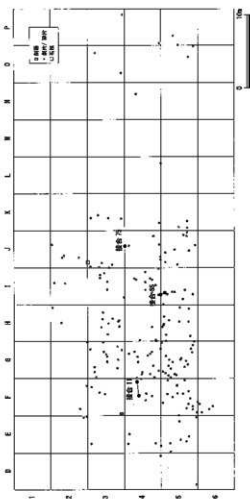


図31 破片の分布

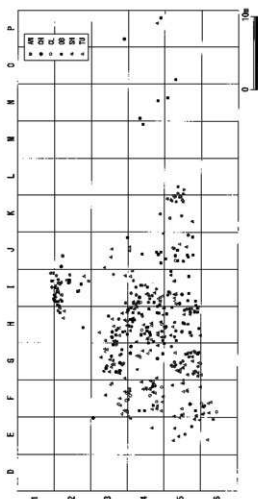
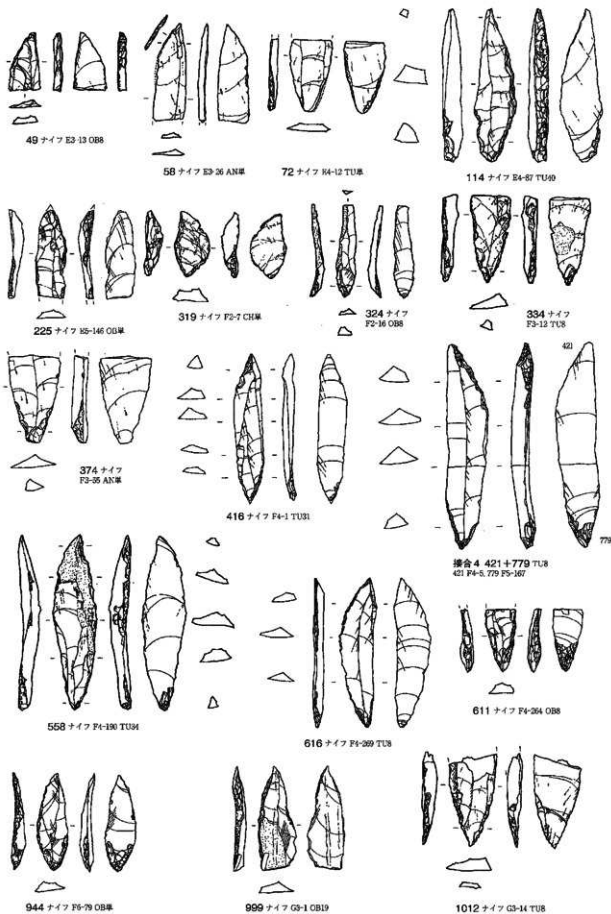
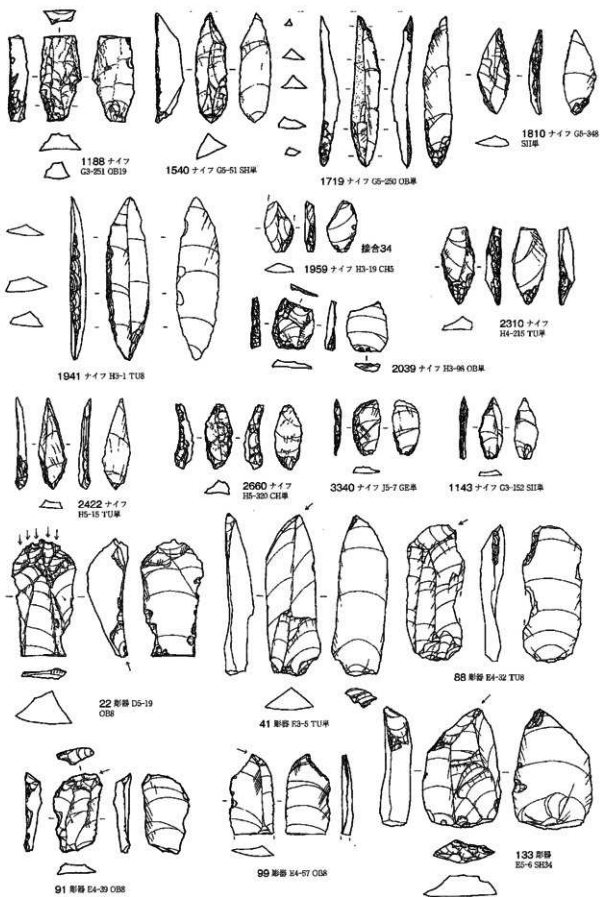


表2 上ノ原遺跡(第2次)出土の主要遺物一覧表

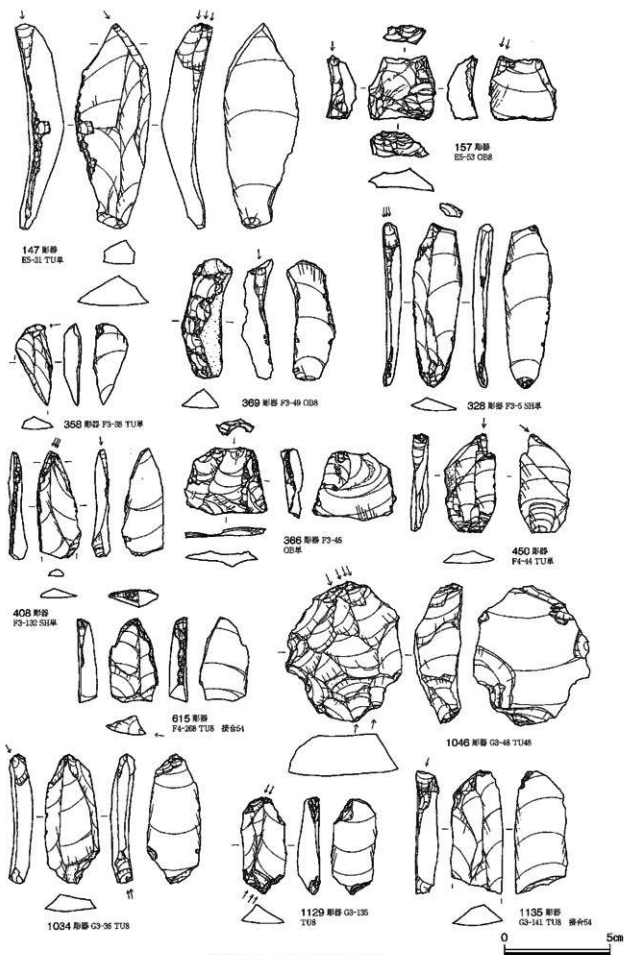
発掘 番号	プロット	層	遺物 番号	品名	材質	用途	長さ (mm)	幅 (mm)	重さ (g)	打痕	二色	形	状態	備考	図録		
22	2F	14	4274	1623	SH	3	PO	丸形磨石	94	29	7.5	7.24	G	*	*	片断	
22	2F	14	4275	1624	SH	3	PO	丸形磨石	57	29	9.7	14.91	H	*	*	片断	
30	3F	3	4171	1374	SH	3	PO	丸形磨石	101	48	21.3	11.18	H	*	*	片断	
30	3F	3	4172	1375	SH	3	PO	丸形磨石	90	43	18.1	12.99	H	*	*	片断	
41	4F	5	4077	1344	TU	3	KN	丸形磨石	89	41	14.9	8	*	*	*	片断	
41	4F	5	4099	1353	SH	3	PO	丸形磨石	85	44	20.8	14.34	H	*	*	片断	
42	4F	5	4098	1352	SH	3	PO	丸形磨石	26	14	2.3	1.26	H	*	*	片断	
42	4F	5	4099	1353	SH	3	PO	丸形磨石	95	26	5.5	11.61	G	*	*	片断	
46	4F	5	4098	1352	SH	3	PO	丸形磨石	80	43	8.4	7.68	G	*	*	片断	
46	4F	5	4099	1353	SH	3	PO	丸形磨石	44	17	8.2	3.20	G	*	*	片断	
73	7F	12	4089	1349	TU	3	KN	丸形磨石	52	18	2.4	2.72	G	*	*	片断	
78	7F	12	4091	1351	TU	3	KN	丸形磨石	50	20	8.1	5.60	H	*	*	片断	
82	8F	13	4069	1374	SH	3	PO	丸形磨石	40	11	6.0	2.61	G	*	*	片断	
82	8F	13	4069	1374	SH	3	PO	丸形磨石	82	26	14.6	10.13	H	*	*	片断	
86	8F	13	4097	1387	TU	3	KN	丸形磨石	81	27	8.5	13.70	G	*	*	片断	
91	9F	20	4076	1363	SH	3	PO	丸形磨石	38	20	8.7	4.90	G	*	*	片断	
98	9F	27	4068	1365	SH	3	PO	丸形磨石	20	20	4.4	2.00	G	*	*	片断	
104	10F	44	4068	1365	SH	3	PO	丸形磨石	62	29	6.4	13.12	H	*	*	片断	
104	10F	44	4068	1365	SH	3	PO	丸形磨石	42	24	13.2	11.68	H	*	*	片断	
114	11F	47	4093	1373	TU	40	KN	丸形磨石	68	18	8.7	16.42	H	*	*	片断	
120	12F	46	4091	1369	SH	3	PO	丸形磨石	62	16	5.4	3.60	H	*	*	片断	
120	12F	46	4091	1369	SH	3	PO	丸形磨石	38	15	5.2	2.80	H	*	*	片断	
138	13F	5	4091	1369	SH	3	PO	丸形磨石	50	36	14.0	10.64	G	*	*	片断	
138	13F	5	4091	1369	SH	3	PO	丸形磨石	76	22	20	14.6	7.68	G	*	*	片断
146	14F	23	4097	1387	SH	3	PO	丸形磨石	54	34	12.8	23.68	H	*	*	片断	
146	14F	23	4097	1387	SH	3	PO	丸形磨石	24	17	8.1	4.30	H	*	*	片断	
147	14F	27	4094	1382	SH	3	PO	丸形磨石	84	20	7.9	13.69	G	*	*	片断	
137	13F	5	4076	1363	SH	3	PO	丸形磨石	28	20	12.4	10.43	H	*	*	片断	
138	13F	5	4069	1374	SH	3	PO	丸形磨石	59	18	2.6	2.81	G	*	*	片断	
184	18F	10	4093	1373	SH	3	PO	丸形磨石	76	25	23	11.0	14.42	G	*	*	片断
184	18F	10	4093	1373	SH	3	PO	丸形磨石	38	20	23.3	10.34	H	*	*	片断	
201	20F	12	4069	1374	SH	3	PO	丸形磨石	76	20	12.7	13.69	H	*	*	片断	
213	21F	13	4067	1367	SH	3	PO	丸形磨石	76	16	37	10.0	43.84	G	*	*	片断
213	21F	13	4067	1367	SH	3	PO	丸形磨石	76	43	22	13.0	14.92	G	*	*	片断
214	21F	13	4069	1374	SH	3	PO	丸形磨石	76	25	20	4.5	2.44	G	*	*	片断
214	21F	13	4069	1374	SH	3	PO	丸形磨石	76	19	15	9.2	8.71	G	*	*	片断
226	22F	14	4067	1367	SH	3	PO	丸形磨石	38	19	5.2	2.80	G	*	*	片断	
268	26F	25	4069	1374	SH	3	PO	丸形磨石	52	41	20	10.1	11.24	H	*	*	片断
294	29F	32	4064	1364	SH	3	PO	丸形磨石	18	9	2.4	0.58	H	*	*	片断	
317	31F	3	4023	1359	SH	3	PO	丸形磨石	29	25	20	6.0	10.8	H	*	*	片断
319	31F	7	4091	1369	SH	3	PO	丸形磨石	23	18	4.4	1.68	H	*	*	片断	
322	32F	14	4067	1367	SH	3	PO	丸形磨石	43	32	15.5	22.28	H	*	*	片断	
324	32F	18	4067	1367	SH	3	PO	丸形磨石	61	9	5.0	1.70	H	*	*	片断	
324	32F	18	4067	1367	SH	3	PO	丸形磨石	72	21	23.8	8.95	H	*	*	片断	
330	33F	10	4050	1343	SH	3	PO	丸形磨石	50	28	10.5	10.67	G	*	*	片断	
334	33F	12	4050	1343	SH	3	PO	丸形磨石	19	13	6.3	3.50	G	*	*	片断	
361	36F	19	4050	1343	SH	3	PO	丸形磨石	12	6.2	1.0	1.02	G	*	*	片断	
366	36F	20	4051	1344	SH	3	PO	丸形磨石	10	10	6.7	2.18	G	*	*	片断	
366	36F	20	4051	1344	SH	3	PO	丸形磨石	39	38	8.5	7.82	G	*	*	片断	
388	38F	40	4057	1349	SH	3	PO	丸形磨石	53	21	1.5	4.42	A	*	*	片断	
374	37F	35	4057	1349	SH	3	PO	丸形磨石	38	24	1.60	8	*	*	片断		
381	38F	37	4054	1348	SH	3	PO	丸形磨石	102	20	5.8	20.68	G	*	*	片断	
391	39F	50	4052	1347	SH	3	PO	丸形磨石	42	21	6.3	4.40	H	*	*	片断	
400	40F	59	4041	1347	SH	3	PO	丸形磨石	38	44	12.8	27.30	G	*	*	片断	
404	40F	135	4051	1349	SH	3	PO	丸形磨石	46	20	5.8	4.85	H	*	*	片断	
406	40F	132	4052	1348	SH	3	PO	丸形磨石	46	20	6.8	4.41	H	*	*	片断	
411	41F	17	4052	1348	SH	3	PO	丸形磨石	66	12	4.8	3.20	H	*	*	片断	
416	41F	3	4042	1344	SH	3	PO	丸形磨石	52	20	2.8	4.20	G	*	*	片断	
416	41F	3	4042	1344	SH	3	PO	丸形磨石	42	22	11.0	10.60	G	*	*	片断	
421	41F	3	4052	1348	SH	3	PO	丸形磨石	78	40	1.0	4.30	G	*	*	片断	
427	41F	3	4041	1347	SH	3	PO	丸形磨石	38	28	8.8	4.58	H	*	*	片断	
422	41F	3	4050	1343	SH	3	PO	丸形磨石	11	9	3.0	0.40	G	*	*	片断	
427	41F	3	4041	1347	SH	3	PO	丸形磨石	52	48	33	10.2	14.79	H	*	*	片断
444	44F	37	4041	1347	SH	3	PO	丸形磨石	100	36	26.5	10.20	G	*	*	片断	
450	44F	44	4052	1348	SH	3	PO	丸形磨石	44	24	5.4	7.20	H	*	*	片断	
470	47F	32	4051	1349	SH	3	PO	丸形磨石	47	40	8.3	1.81	G	*	*	片断	
480	48F	37	4051	1349	SH	3	PO	丸形磨石	47	26	1.0	7.83	G	*	*	片断	
486	48F	103	4041	1347	SH	3	PO	丸形磨石	63	42	26	8.7	9.27	G	*	*	片断
496	49F	123	4049	1346	TU	3	KN	丸形磨石	107	21	10.5	18.18	G	*	*	片断	
510	51F	124	4052	1348	SH	3	PO	丸形磨石	26	18	4.0	2.72	H	*	*	片断	
518	51F	133	4041	1347	SH	3	PO	丸形磨石	47	40	5.3	8.15	G	*	*	片断	
526	52F	147	4041	1347	SH	3	PO	丸形磨石	40	21	3.0	3.00	G	*	*	片断	
544	54F	174	4041	1347	SH	3	PO	丸形磨石	6	8	0.6	6.10	H	*	*	片断	
560	56F	180	4042	1348	SH	3	PO	丸形磨石	63	40	4.8	24.61	G	*	*	片断	
558	56F	180	4042	1348	SH	3	PO	丸形磨石	79	19	7.0	4.82	H	*	*	片断	
566	56F	180	4042	1348	SH	3	PO	丸形磨石	61	29	8.1	9.40	H	*	*	片断	
576	57F	211	4052	1348	SH	3	PO	丸形磨石	83	38	8.3	26.73	H	*	*	片断	
600	60F	246	4041	1347	SH	3	PO	丸形磨石	67	35	8.3	11.08	G	*	*	片断	
604	60F	255	4042	1348	SH	3	PO	丸形磨石	46	18	6.1	0.30	G	*	*	片断	
610	61F	263	4051	1349	SH	3	PO	丸形磨石	17	6	3.9	0.38	G	*	*	片断	
611	61F	261	4049	1346	TU	3	KN	丸形磨石	28	12	5.8	1.80	G	*	*	片断	
613	61F	258	4042	1348	SH	3	PO	丸形磨石	34	37	21	3.4	5.23	H	*	*	片断
614	61F	269	4053	1349	SH	3	PO	丸形磨石	67	17	4.8	H	*	*	片断		
618	61F	271	4041	1347	SH	3	PO	丸形磨石	18	8	2.8	2.80	G	*	*	片断	
618	61F	271	4041	1347	SH	3	PO	丸形磨石	40	20	6.3	6.35	H	*	*	片断	
626	62F	279	4041	1347	SH	3	PO	丸形磨石	41	23	3.8	1.90	G	*	*	片断	
624	62F	290	4052	1348	SH	3	PO	丸形磨石	34	34	5.5	14.3	H	*	*	片断	
644	64F	324	4041	1347	SH	3	PO	丸形磨石	43	54	12.7	23.21	G	*	*	片断	
647	64F	323	4042	1348	SH	3	PO	丸形磨石	1	36	2.8	3.75	H	*	*	片断	
654	65F	3	4051	1349	SH	3	PO	丸形磨石	29	18	1.6	1.81	H	*	*	片断	
712	71F	37	4041	1347	SH	3	PO	丸形磨石	13	41	4.3	6.8	H	*	*	片断	
774	77F	182	4041	1347	SH	3	PO	丸形磨石	4	28	1.6	3.40	H	*	*	片断	
781	78F	189	4041	1347	SH	3	PO	丸形磨石	32	41	6.8	18.38	H	*	*	片断	
780	78F	179	4049	1346	SH	3	PO	丸形磨石	63	37	7.1	9.7	G	*	*	片断	



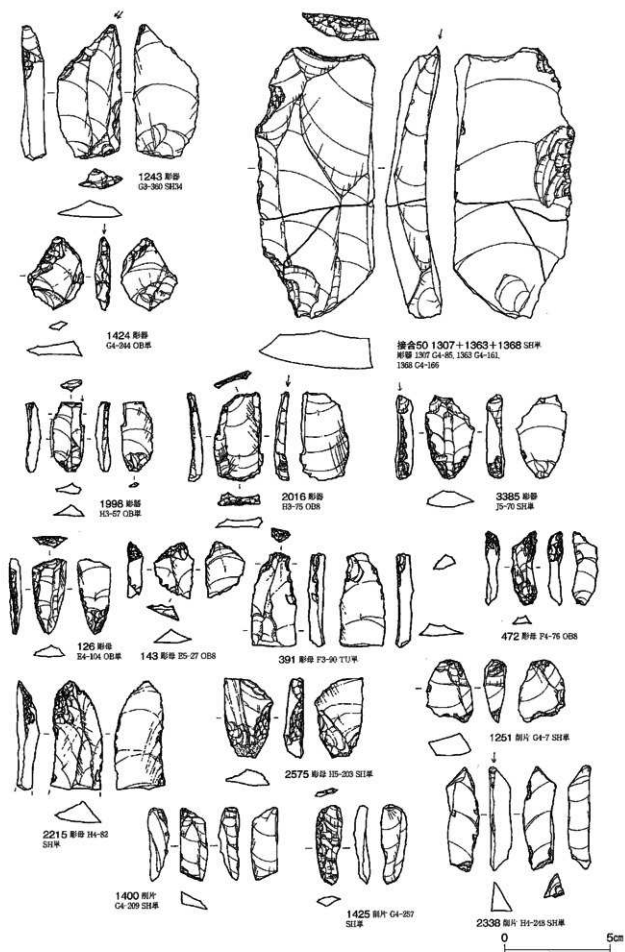
石器図版1 ナイフ形石器群(1)



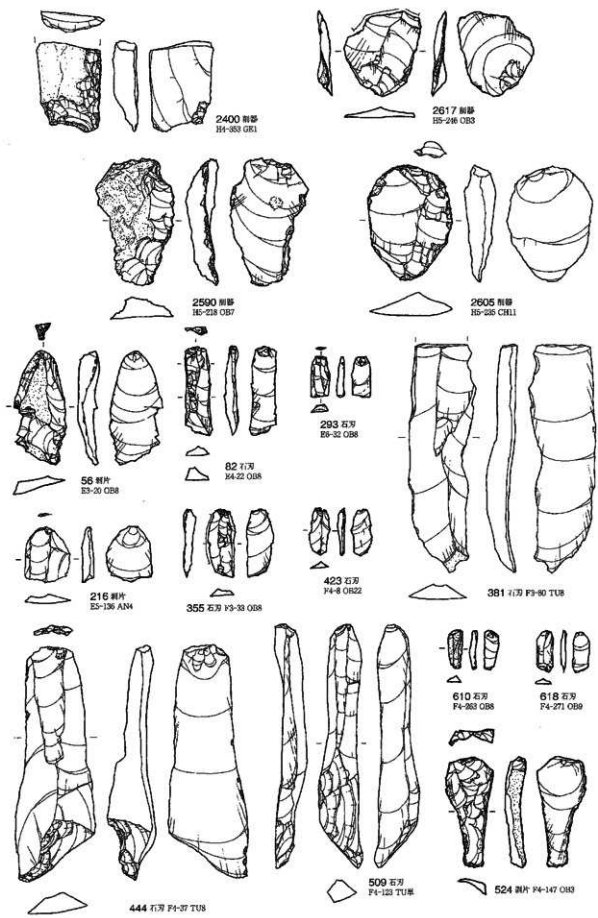
石器図版2 ナイフ形石器群(2)



石器図版3 ナイフ形石器群(3)

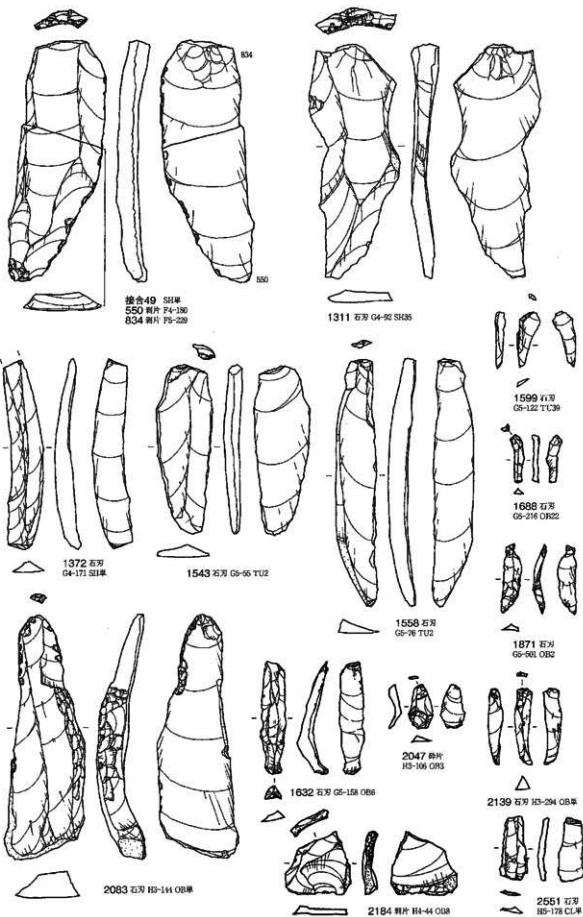


石器図版4 ナイフ形石器群(4)

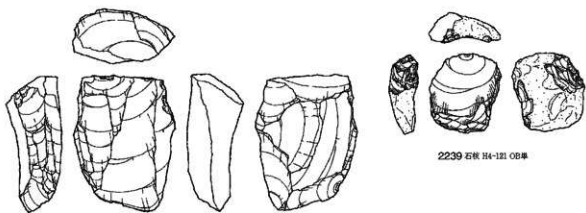


石器図版5 ナイフ形石器群(5)



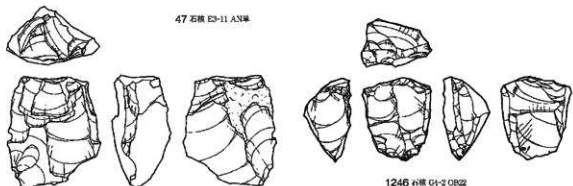


石器図版6 ナイフ形石器群(6)



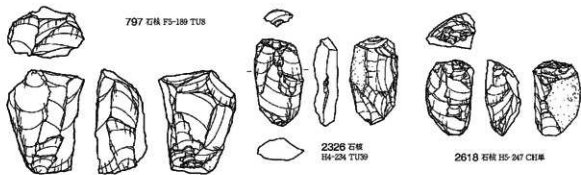
47 石核 E3-11 AN

2239 石核 H4-1E1 08



797 石核 F5-189 TUS

1246 石核 C1-2 OR2

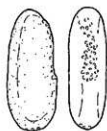


2326 石核
H4-2M TU30

2618 石核 H5-247 CH



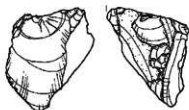
1559 石核 H5-77 CH



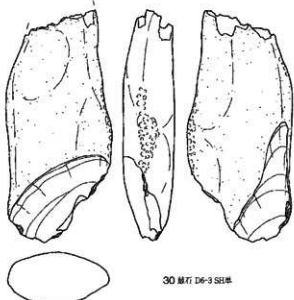
868 石核
F5-344 TUM



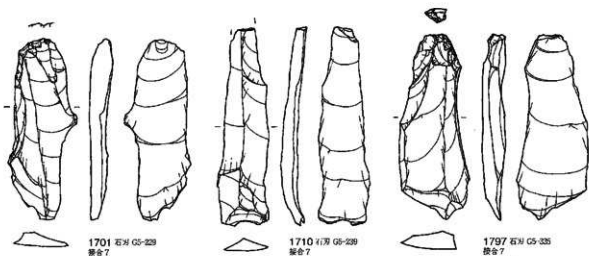
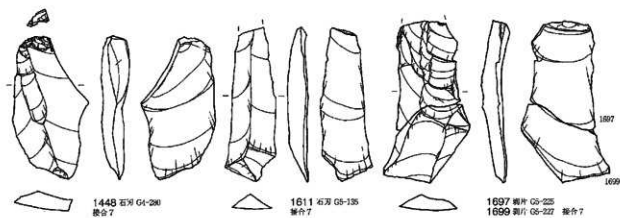
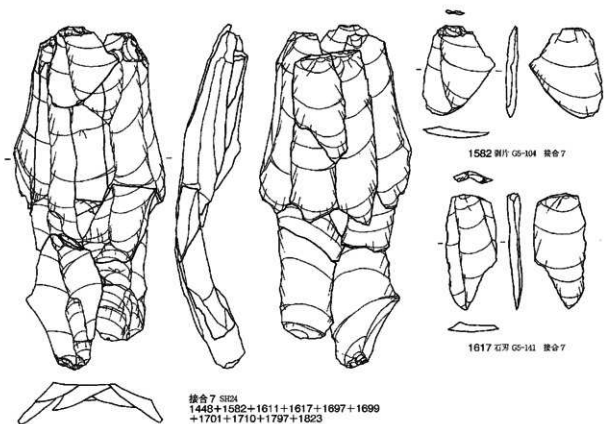
2369 石核 H4-2B3 OR



30 石核 D6-3 SES

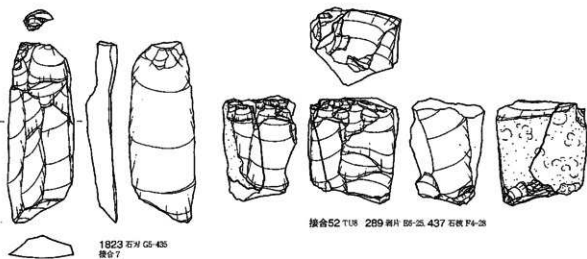


石器図版 7 ナイフ形石器群 (7)



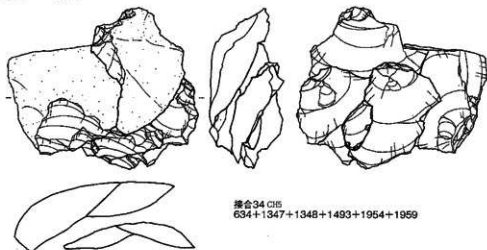
石器図版8 ナイフ形石器群(8)

0 5cm

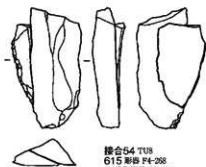


1823 石刀 G5-435
接合7

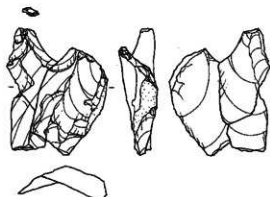
接合52 TU8 289 削片 B5-25.437 石杖 F4-28



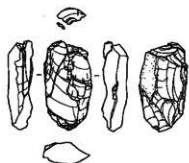
接合34 C15
634+1347+1348+1493+1954+1959



接合54 TU8
615 削片 F4-268
1135 削片 G3-141



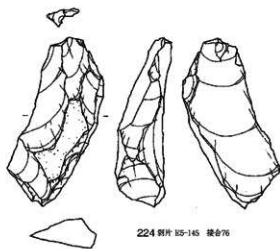
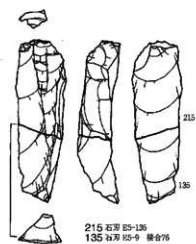
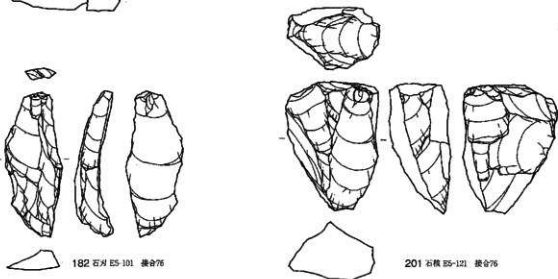
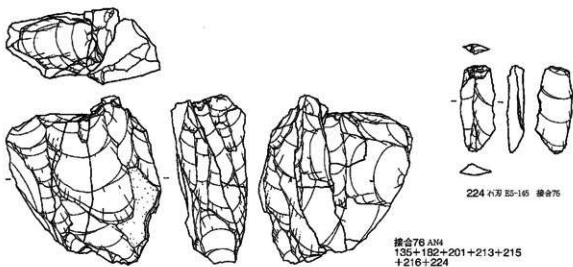
接合89 C13
496 削片 F4-102.2198 削片 H4-61
2610 削片 H5-229



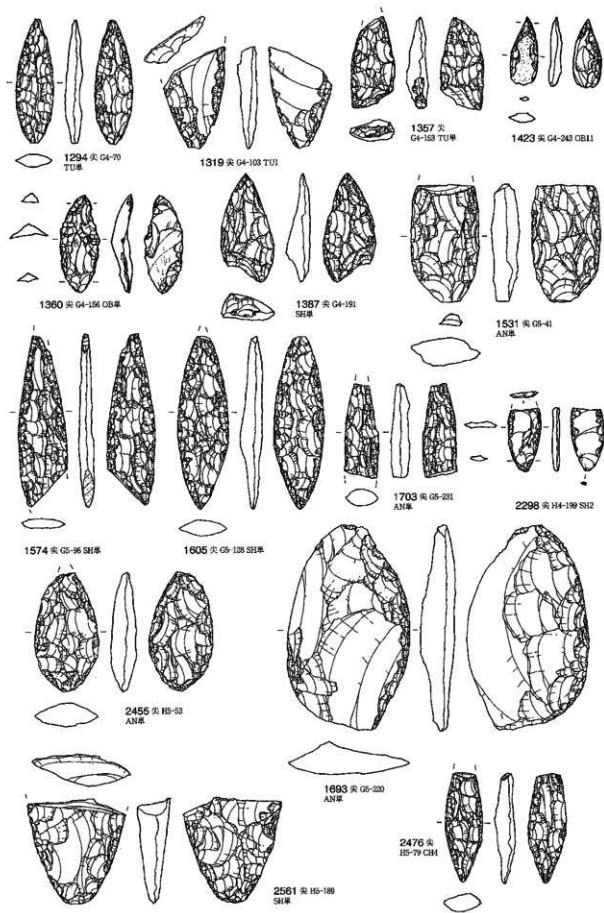
接合84 TU39
1598 石刀 G5-122
2326 石杖 H4-254



石器図版9 ナイフ形石器群(9)

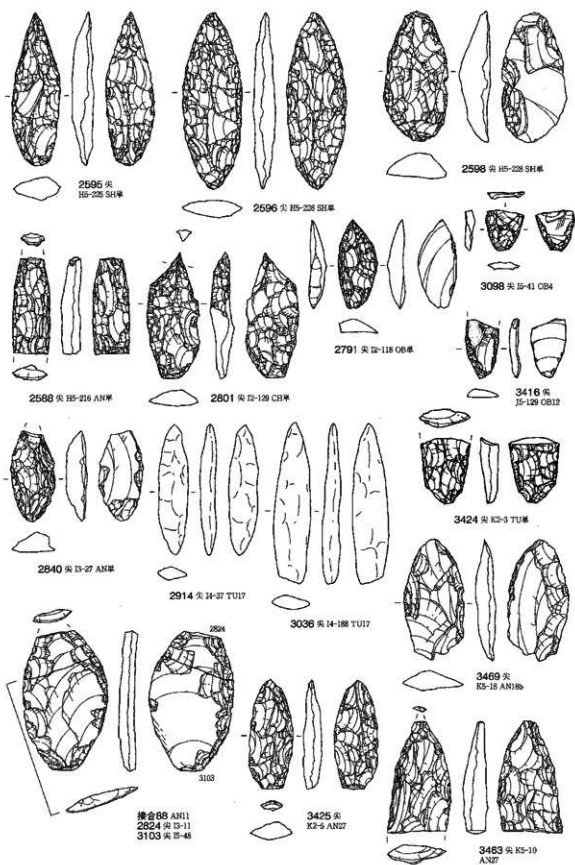


石器図版10 ナイフ形石器群 (10)



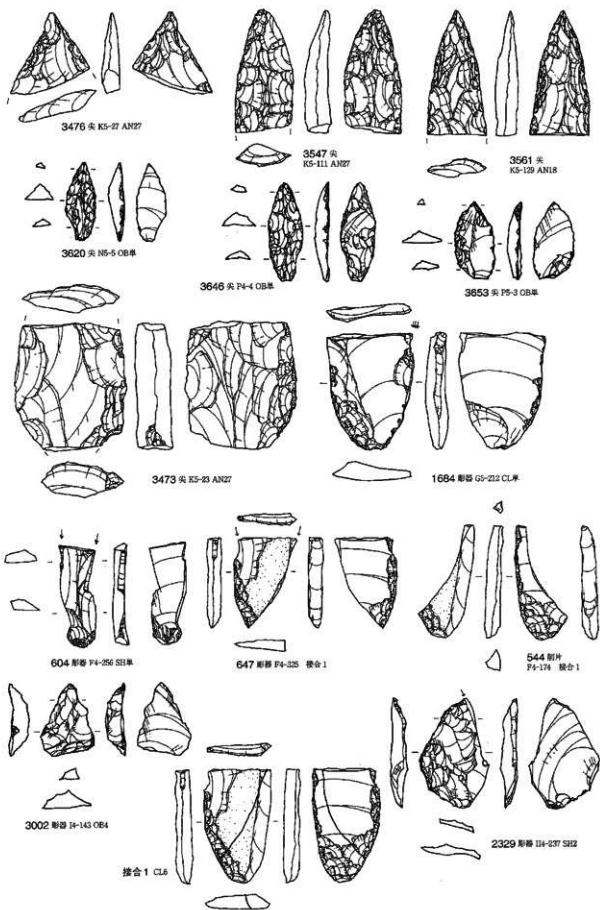
石器图版12 尖頭器石器群(2)

0 5cm



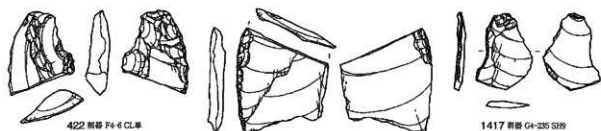
石器图版13 尖器器石群 (3)

0 5cm



石器图版14 尖頭器石器群(4)

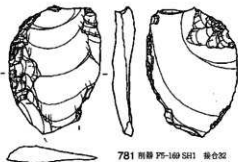




422 削片 F4-6 CL#

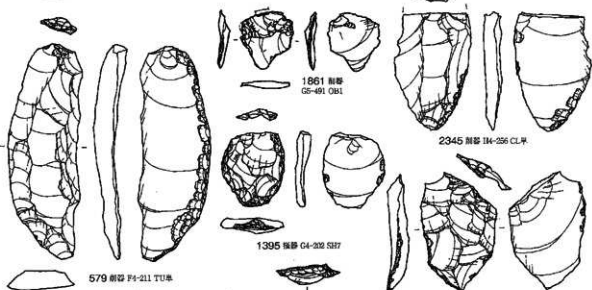
519 削片 F4-134 TU1

1417 削片 G4-235 SH9



781 削片 F5-169 SH1 接合部

3250 削片 J3-1 SH19

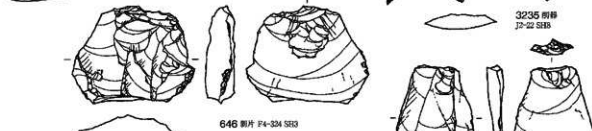


1861 削片
G5-491 OB1

2345 削片 I4-256 CL#

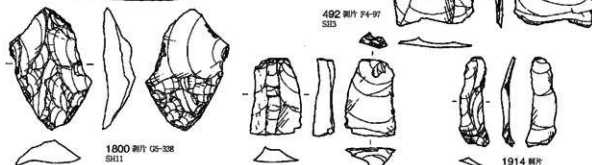
579 削片 F4-211 TU#

1395 削片 G4-202 SH7



646 削片 F4-304 SH3

3235 削片
J2-22 SH5



492 削片 F4-97
SH2

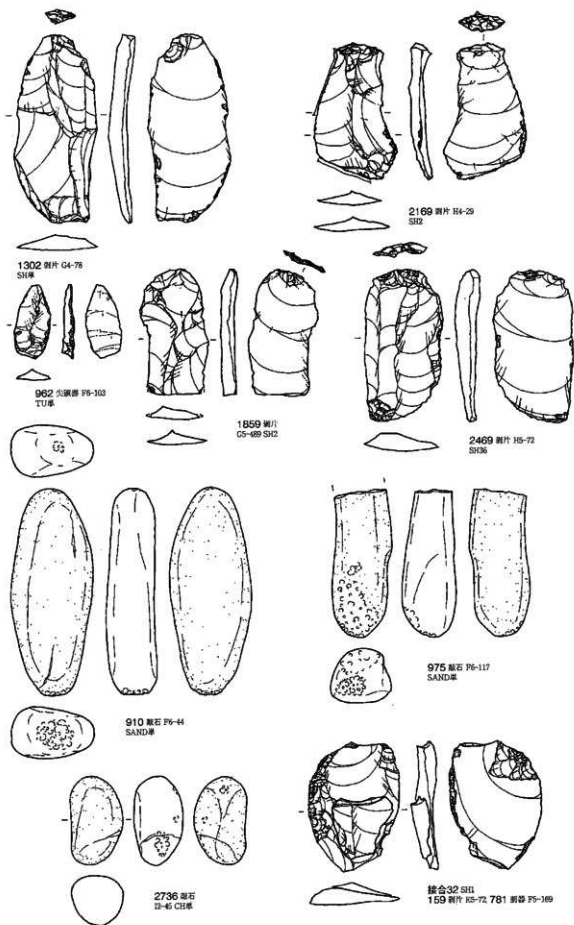
1800 削片 G5-308
SH11

2626 削片 H5-256 SH2

1914 削片
H2-37 OB2



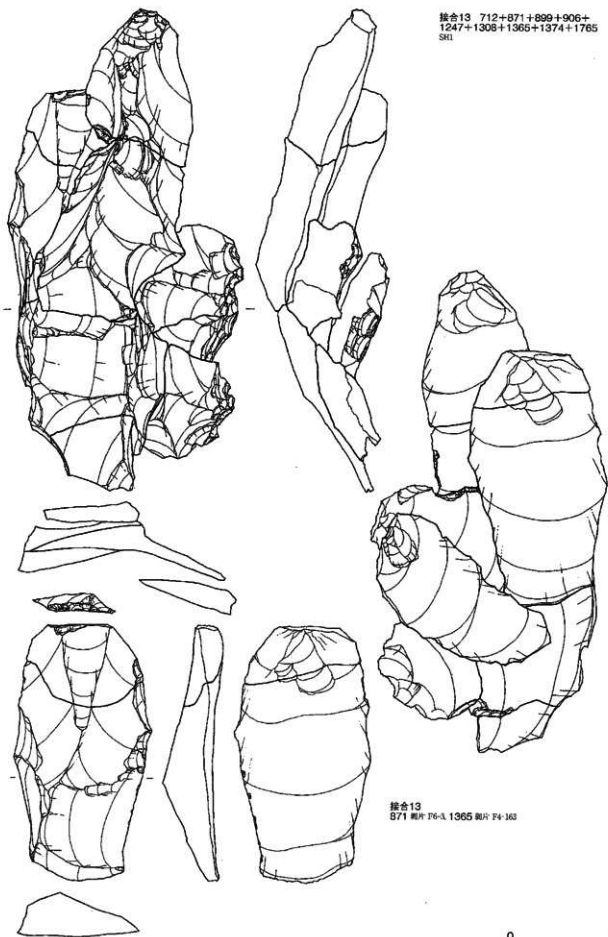
石器圖版15 尖頭器石器群(5)



0 5cm

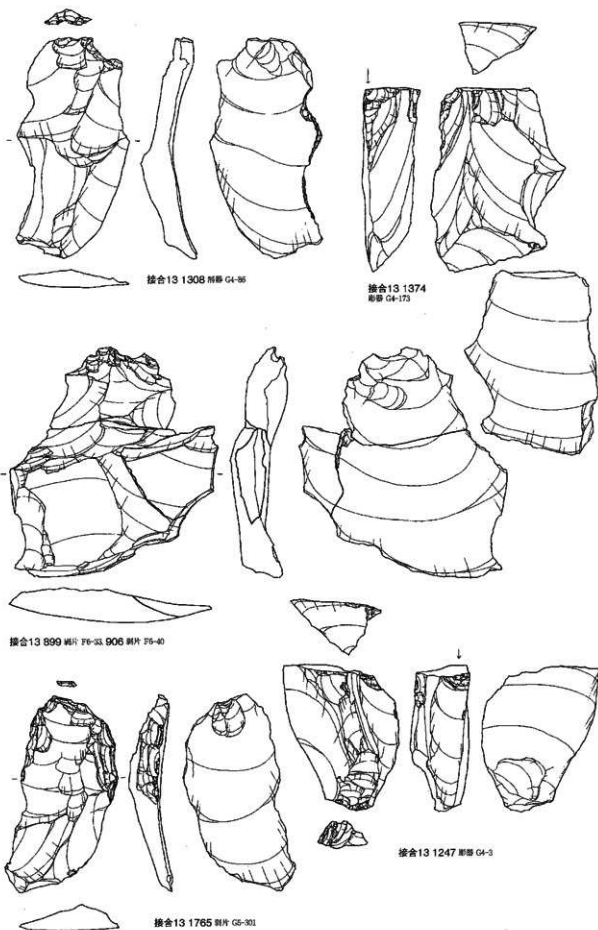
石器圖版16 尖頭礮石群(6)

接合13 712+871+899+906+
1247+1308+1365+1374+1765
SH1



接合13
871 照片 76-3, 1365 照片 74-163

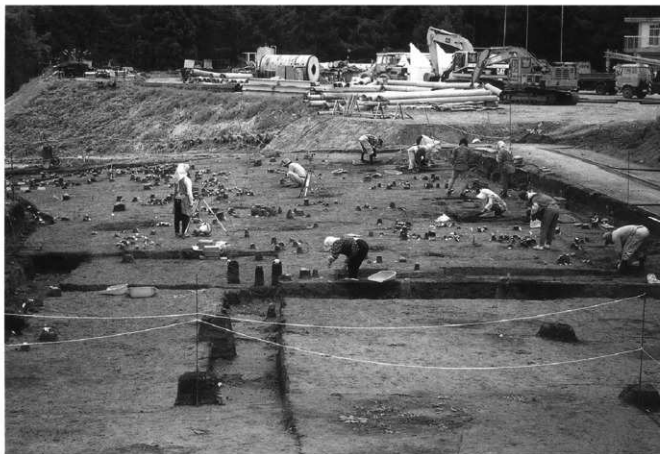
石器圖版17 尖頭礮石器群 (7)



石器图版18 尖頭器石器群 (8)



写 真 图 版



上ノ原遺跡（第2次）発掘風景 西側 1993年9月



上ノ原遺跡（第2次）発掘風景 裸群集中部F～H列 1993年9月



上ノ原遺跡（第2次）発掘風景 1993年5月



上ノ原遺跡（第2次）発掘風景 1993年6月



西南部の遺物出土状況 1993年6月



北西部の遺物記録 1993年7月



西部の遺物出土状況・発掘風景 1993年8月



調査終了時 1993年10月



現地指導 松森和人先生



現地指導 安森政雄先生ほか皆様

発掘写真 3



磯群周辺の遺物記録 1993年



発掘参加者の皆さん



遺跡現地説明会 1993年8月21日



遺跡現地説明会 1993年8月21日



石刃の出土状況 364 (F3-44)



ナイフ形石器の出土状況 1719 (G5-250)



尖頭器の出土状況 1605 (G5-128)



尖頭器の出土状況 2595 (H5-225)



尖頭器の出土状況 2596 (H5-226)



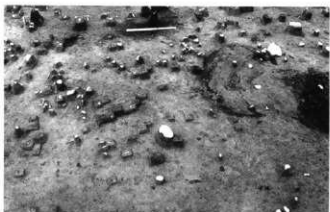
塚群の出土状況 E~H列



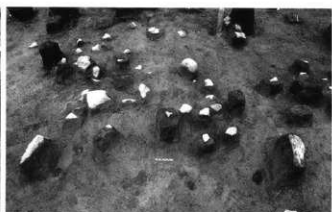
塚群周辺の遺物出土状況 スケール1m



EF・5-6グリッド遺物出土状況 スケール1m

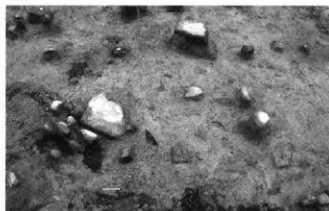


G5グリッド 遺物出土状況 スケール1m



塚群 F5③ スケール10cm

発掘写真 5



礫群 G5⑤ スケール10cm



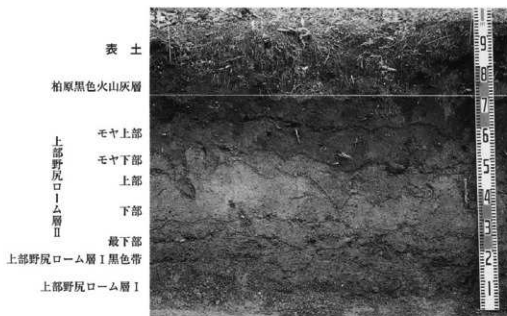
礫 (G5-147) とナイフ形石器 (1719・G5-250)



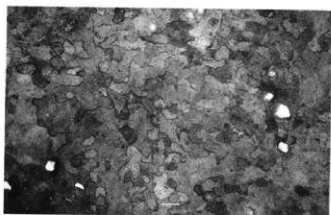
礫群の記録風景 H3④



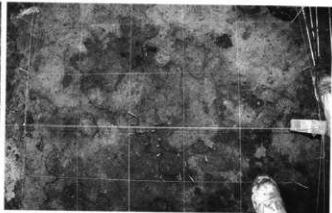
近現代の灰窯 D・E6グリッド



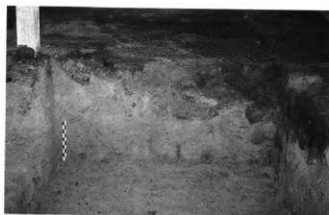
発掘地の地質層序



F4グリッドの焼土 上が北側 スケール10cm



F4グリッドの焼土 上が南側 方眼は1辺20cm



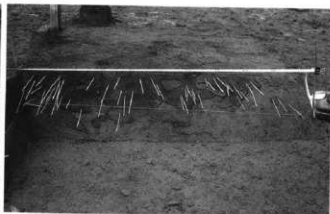
焼土 東西断面の西側 (南から) スケール10cm



焼土 南北断面の南側 (西から)



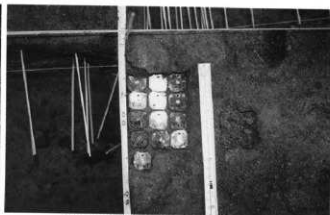
焼土付近の炭化物の記録



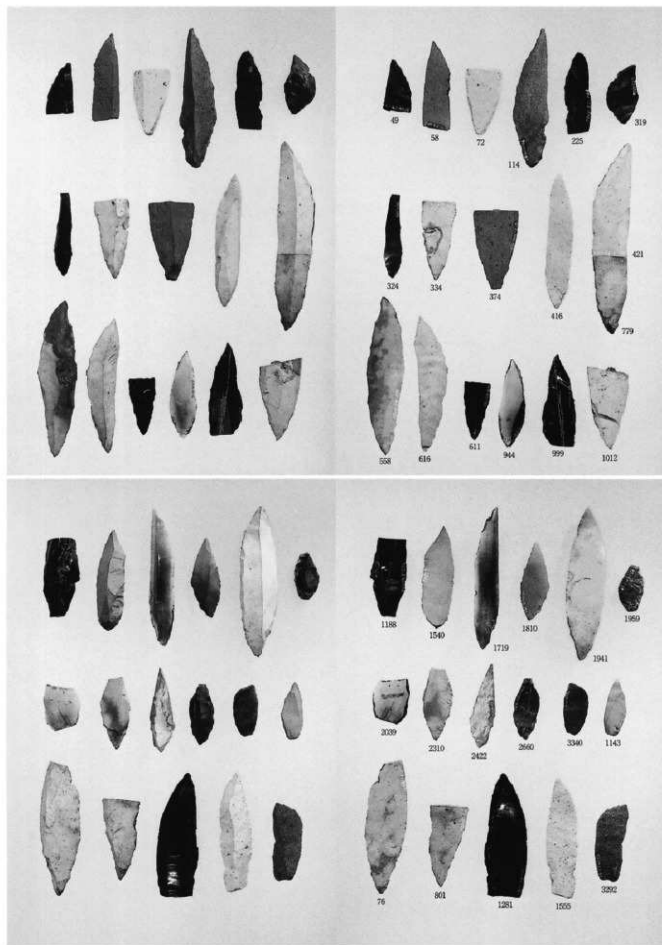
焼土 南北断面の北側 炭化物の記録 (東から)



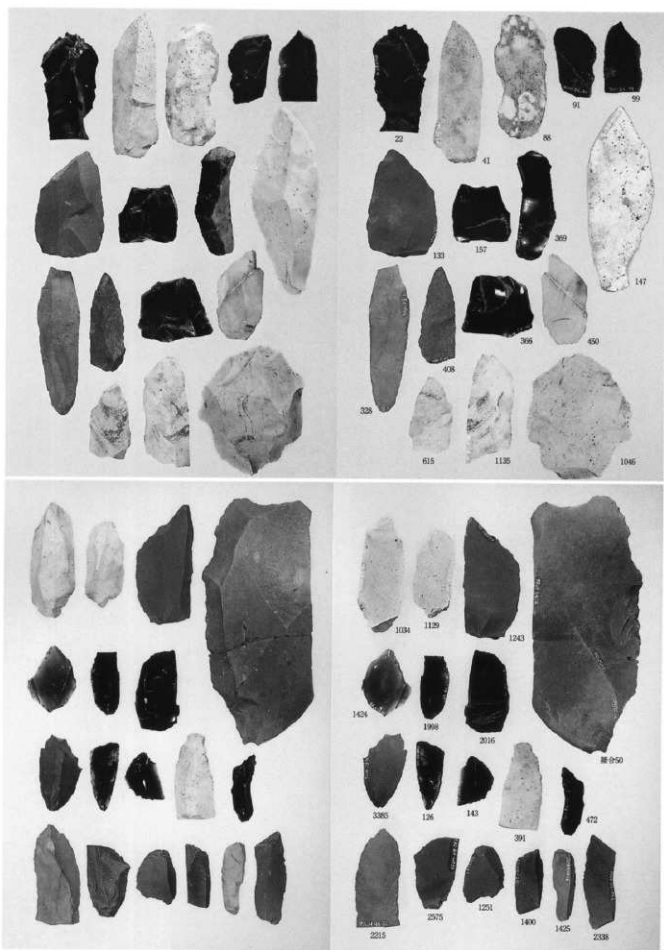
焼土付近の調査風景 1993年10月



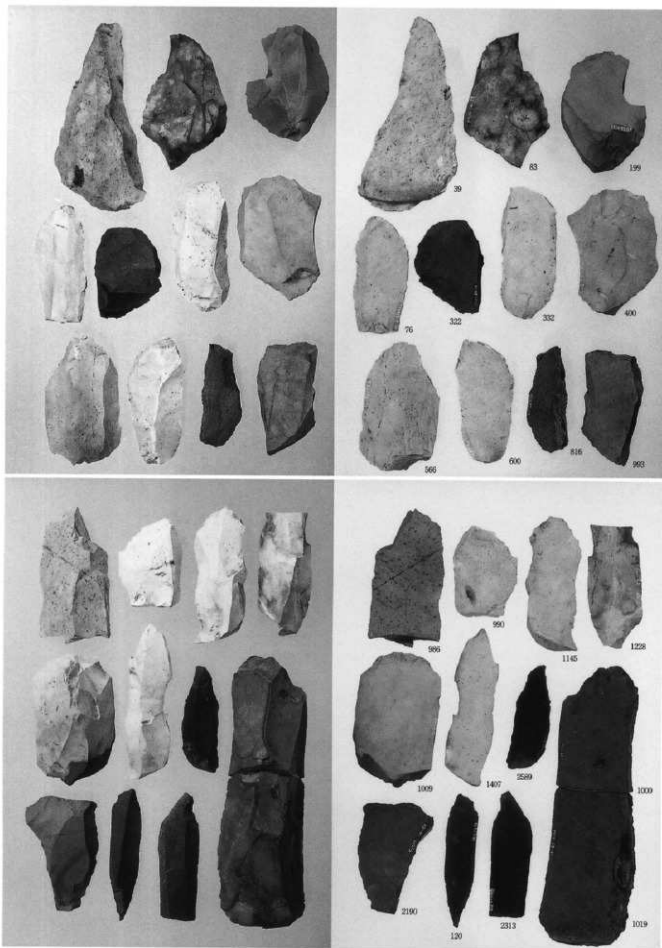
焼土の古地磁気サンプル採集 1993年10月



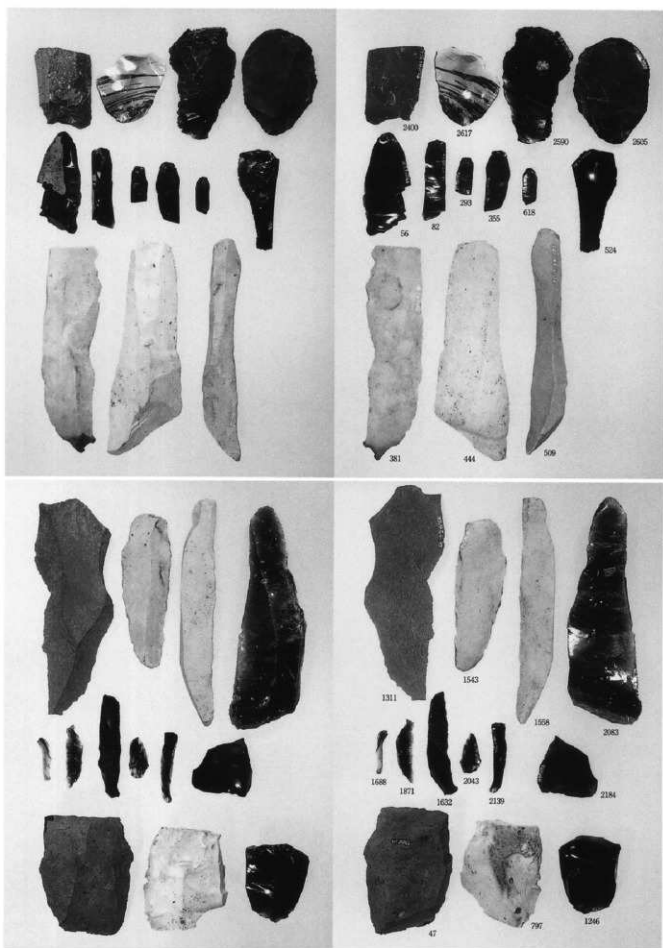
ナイフ形石器群 ナイフ形石器 (1 : 2)



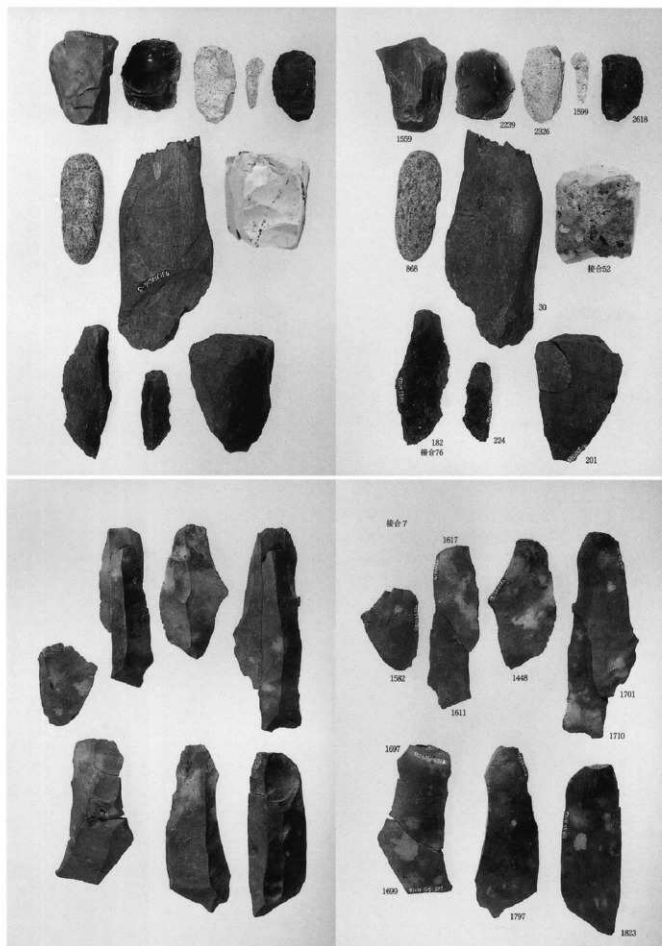
ナイフ形石器群 形器・形器母型・削片 (1 : 2)



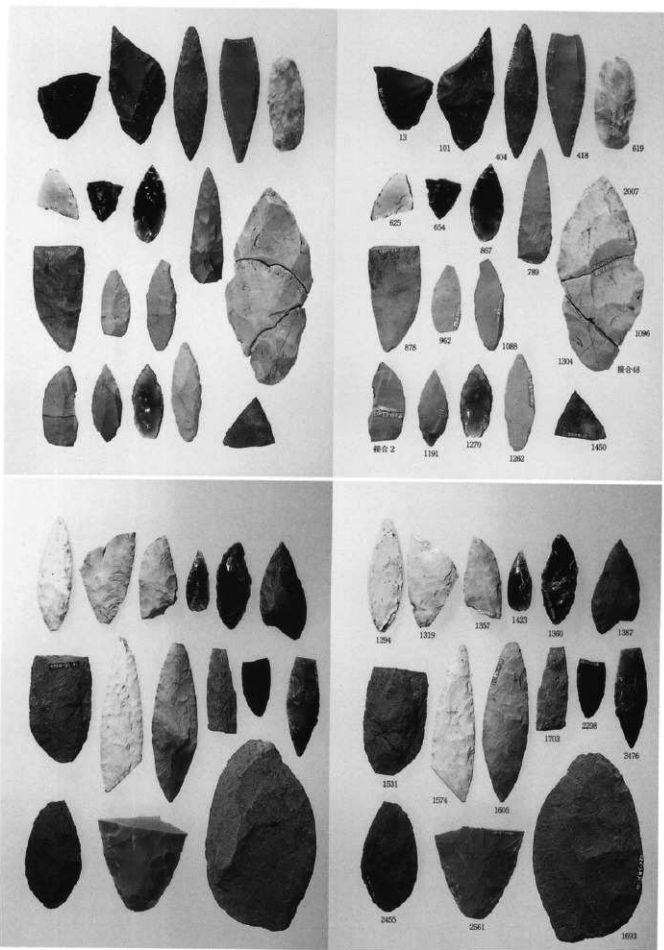
ナイフ形石器群 彫器・彫器母型 (1:2)



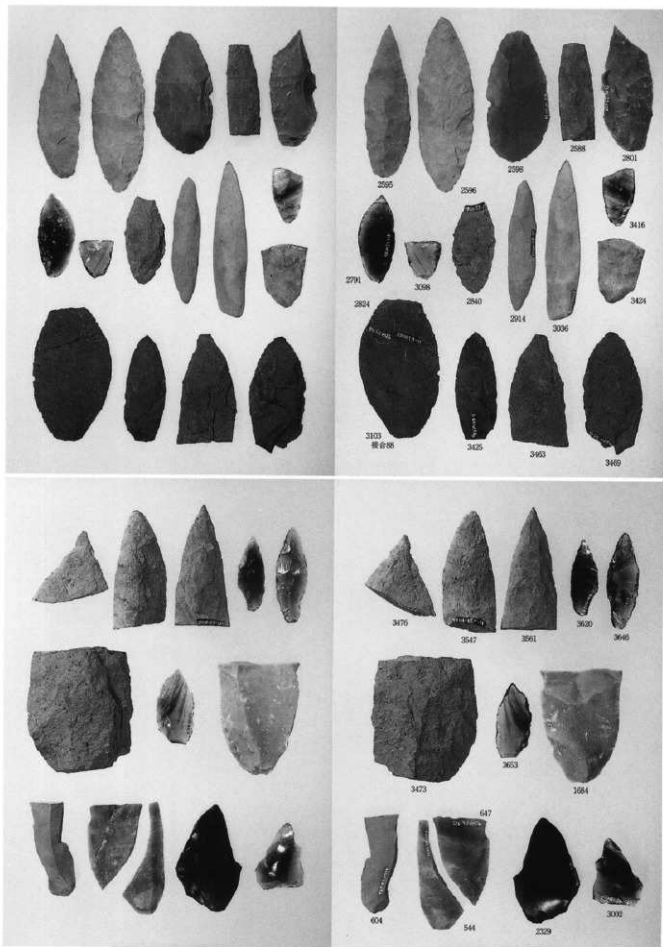
ナイフ形石器群 刮器・石刃・剥片・碎片・石核 (1:2)



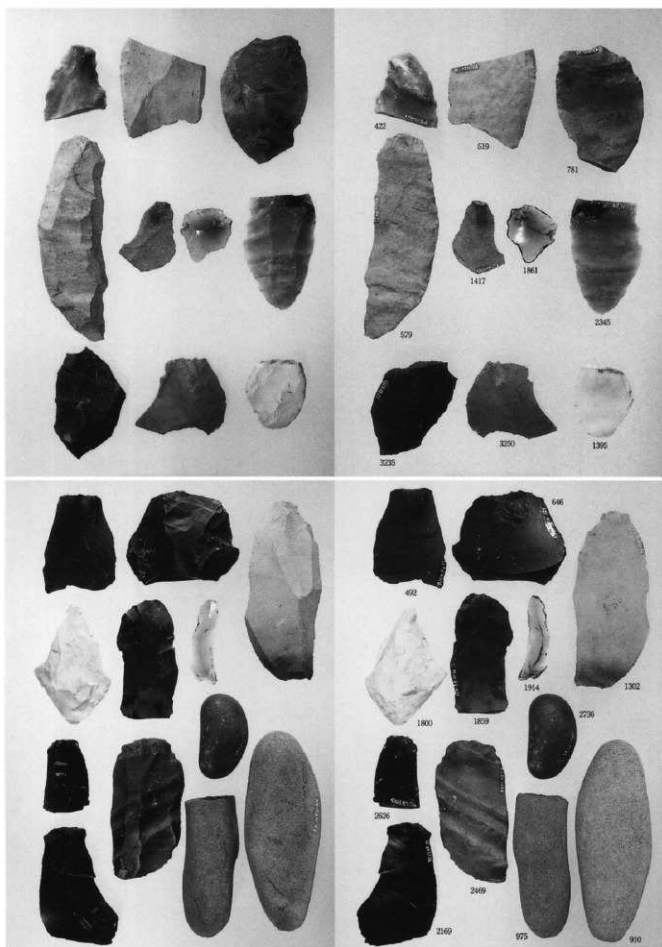
ナイフ形石器群 石核・敲石・接合資料 (1:2)



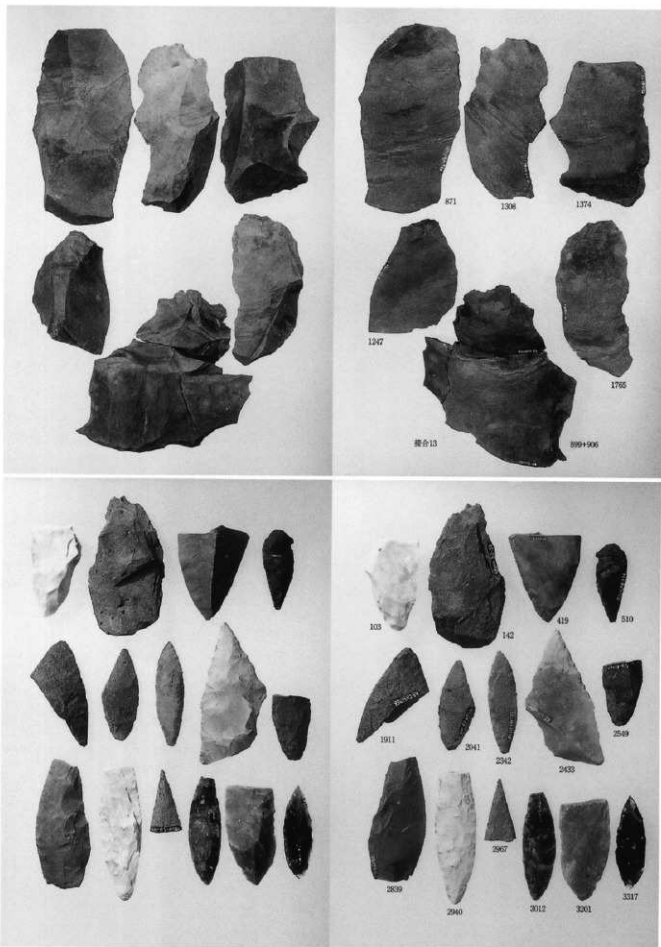
尖頭器石器群 尖頭器 (1:2)



尖頭器石器群 尖頭器・彫器・削片 (1:2)



尖頭器石器群 刮器・搔器・剥片・敲石(1:2)



尖頭器石器群 接合資料 (上, 2 : 5), 尖頭器 (下, 1 : 2)

S U M M A R Y

Nojiri-ko site cluster, which is composed of 44 archaeological sites, is located on the western shore of the Lake Nojiri, and each site stands within the adjacent area. The Uenohara site (the second excavation site) is located at Nishioka, Kashiwabara, Shinano-machi, in the North of Nagano prefecture, Central Japan. It is situated on lat. 36° 48' 56.9" N, long. 138° 11' 45.7" E, and is between 705.5 and 708 meters above sea level. The excavation was carried out from May 10th 1993 to October 12th 1993, by the Shinano Town Board of Education, prior to the construction of the local road, the Kashiwabara-main line (the Suginosawa-Kurohime station line). The total excavation area is approximately 1,800m².

The remains that totaled 5,313 were excavated. 2,974 pieces of Palaeolithic Period stone tools, 1,782 pieces of gravels, 19 pieces of Jomon pottery, were found.

Most of the artifacts from the Uenohara site belong to the Palaeolithic Period. The results of the excavation are as follows.

1 The late half of the Late Palaeolithic Period (about 20,000~14,000 yr.B.P.)

Among the 2,974 pieces of stone tools and fragments found, most of them belong to the latter half of the Late Palaeolithic Period. These artifacts were discovered from the upper horizon of the Upper Nojiri Loam Member II.

1) "The Backed blades industry" (the Sugikubo industry)

The 1,188 pieces of stone tools and fragments found, at this site consisted of: 38 backed blades fabricated from blades, 103 gravers, 20 blanks of graver, 56 spalls, 307 blades, 517 flakes, 105 chips, 32 cores, and 2 hammer stone. The main lithic materials used for the artifacts are: tuff, andesite, shales, and obsidian.

2) "The Point industry"

The 1,578 pieces of stone tools and fragments found, here consisted of 101 points, 35 side scrapers, 12 gravers, 5 spalls, 24 blades, 1,105 flakes, 12 cores, and 3 hammer stone. The main lithic materials used for the artifacts are: andesite, shales, tuffs, and obsidian.

2 Lithic material sources

The obsidian sources in the Nagano prefecture originated 80 to 90km from site to the south. Niigata stone such as shale, tuff, and chalcedony originated 60 to 200km to the northeast. Andesite originated from the Sekita mountainous district 40km to the northeast. Chert originated from the riverbed in the Sai River—the Chikuma River in the Nagano basin, 25km to the south. Geroishi (Yugamine rhyolite) originated from the Yugamine source in Gero City, Gifu Prefecture, originated 140km to the southwest.

(NAKAMURA Yoshikatsu)

報告書抄録

書名	上ノ原遺跡（第2次・町道地点）発掘調査報告書							
副書名	杉久保型ナイフ形石器を含む石器群・尖頭器石器群の遺跡							
シリーズ名	信濃町の埋蔵文化財							
シリーズ番号								
編著者名	中村由克・岩瀬彬							
編集機関	信濃町教育委員会							
所在地	389-1305 長野県上水内郡信濃町柏原428-2 TEL 026-255-5923							
発行年月日	2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
上ノ原遺跡	長野県上水内郡 信濃町大字 柏原字 西岡	市町村	遺跡番号	36°48'56.9" (36°48'45.9")	138°11'45.7" (138°11'56.9")	930510 ～ 931012	1800㎡	町道建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項			
上ノ原遺跡	散布地	旧石器時代	礫群、焼土、 ブロック	ナイフ形石器、 彫器、削器、 彫器、石刃、 尖頭器、彫器、 削器、敲石 接合資料	後期旧石器時代の後半期のナイフ形石器群と 尖頭器石器群が多数出土した。 杉久保石器群には彫器が多く組成し、石核、 接合資料も多数確認され、杉久保の標式地域 における良好な石器資料が得られた。 また、下呂石製の小形のナイフ形石器などが 含まれる。			

(注)北緯・東経は世界測地系による。() 内に旧日本測地系を示す。

信濃町の埋蔵文化財

上ノ原遺跡(第2次・町道地点)発掘調査報告書

— 杉久保型ナイフ形石器を含む石器群・尖頭器石器群の遺跡 —

編集発行 信濃町教育委員会
長野県上水内郡信濃町柏原428-2

発行日 2008年3月31日

印刷 信毎書籍印刷株式会社

〔この報告書についての連絡先〕

野尻湖ナウマンソウ博物館

〒389-1303 長野県上水内郡信濃町野尻287-5

TEL 026-258-2090

FAX 026-258-3551

Archaeological Reports of Shinano-machi

Uenohara Site (2nd Excavation)

Excavation of the Late Palaeolithic Site

2008

Shinano-machi Board of Education,
Kamiminouchi-gun, Nagano, 389-1305 Japan.